

卷頭の言葉



光
と
力

光と力——十方世界にあまねく、不滅に輝く久遠の光と、無礙の力……そういうものが、この混濁の世に実在するならば、それは何と素晴らしいことでしよう。そして私達が、これを仰ぐことが出来、更に自分自身のものとすることが出来たならば、その素晴しさは、たとえようもないことでしよう。

この光あまねき久遠の世界、それがこの世に実在することを、ごく少数の聖者は知っていました。仏陀は、そうした聖者の中の最高の人でした。久遠の光と力そのものを、体得された唯一人の人でした。そして仏陀が説かれた法華經は、仏陀の光と力を、そのままあらわしたものでした。南無妙法蓮華經：それは、光と力を仰ぐ者の歓喜の叫びであったのです。（白象）

鷲峰 ... 3月特別増大号 目次

第2巻、第8号、通巻第9号

巻頭の言葉・光と力	1	
我が怒り・我が祈り	花房 敏	8
我が出家の動機		
26題目は生きている（第2回）	浜島法立	22
聖鷲山と身延山（第3回）		
聖鷲山の仏蹟と多宝山	日高白象	62
テクノボウの祈り（第2回）	樋本蓮子	58
信仰相談室		
青年よ街頭に聖教宣伝せよ	日高白象	68
第5次身延山学生布教運動隊		
九州街頭布教紀行	編集部	75
鷲峰行学研修会と関西門下青年有志合同座談会	102	
教義説明・平和の祈り	佐々木友学	16
身延山青年行学講習会案内		67
読者へのお願い		67
鷲峰奨助会紹介		104
編集後記		105

表紙題字・身延山法主藤井日静院下

表紙写真・インド聖鷲山へ渡る身延山金銅釈迦像

表紙印刷・大阪東洋印刷社より長藤原秀憲氏寄進

カット・身延山みのぶ教報編集部提供

我が怒り

我が祈り

これは電子学を専攻する一学生の

法華經入信以来の絶叫である

神戸 甲南大学四年 花房義

「日本人とは、馬鹿の寄り集りだ！」

昭和三十七年夏八月、第二回身延山青年行学講習会に
参加した当時の僕は、そんな言葉を、誰の前、はゞから
ず、うそぶく男でした。



I

中学三年から始めたテナー・サックスに、次第にとり
つかれ、高校そして大学に入学した頃、日本一のテナー・
マンとなる夢が大きくひろがり、一生の仕事と決めるよ

三

うになりました。

当時

（日本ジャズ界のサックス奏者の第一人

者を完全に追い越した。）

と秘かに、ニヤリとしつゝ、残る三年

間の大学生活で、死にもの狂いに腕をみ
かき、卒業後は日本全国に、

（真のジャズ、人間の魂そのものゝ絶叫
を聞かせてやる！！）

と、かたく肚を決めておりました。

今も変つておりますが、当時、歌謡

曲、ボビュラー・ジャズ・クラシックに
わたって、日本の音楽界には、誰一人と

して、真剣さのあふれた者、魂そのもの
を歌いあげる者がおりませんでした。

（十七。八の鼻つたれ小僧や、十五・六

四

のジャリどもが、人を馬鹿にした歌を、
チャカスカ歌い、それを同じ馬鹿ずらで
多くの若者たちが楽しんでやがる！」

（どうしたというのだ、このザマは！）

何度も、そう思つたことでしょう。

僕の大学は神戸にあるので、外人の集
つている所へ、よく出入りすることがあ

りました。テレビで歌う少年少女の歌と
態度を見ながら外人水兵たちが、

「あれが英語のつもりなのかい？」

「あんな歌で、小僧っ子や小娘が、目を
むくような大金を得られるとは、日本は

天国だ」

という意味のことをしてやべり、最後に、

「オオ、イエロー・トイレット、ネ」

と、ゲラゲラ嘲うのを聞いて、カツと

したことがありました。

(よし、僕がやってやる!!)

(この俺が、日本人の歌を歌いあげてみせる!!)

(日本のジャズを見事に作りあげてみせる!!)

神戸の波止場に立ち、海に向って、何度も何度も叫んだものでした。

II

それから一年……。大學二年の夏
野望に満々とはち切れるような僕を、木
端微塵に打ち碎いた巨人が出現したので
す。

モダン・ジャズ・シーンが生んだ不滅
の一大巨星ソニー・ロリンズでした。

彼によつて、魂を歌いあけることの何
たるか、を思い知らされ、それまでの満
々たる自信と野望が、粉々に砕け、散っ
て行きました。

ロリンズのサックスから流れ出る歌と
は、白人から受ける暴力・恥辱・惨殺・
(実際は、僕たちが想像する数十倍のも
のですが)に対する、黒人の怒りと悲し
みの、血を吐くような絶叫だったのです。
そしてまた、同じ苦しみにあえぐ同胞へ
の悲痛な祈りであつたのです。

僕は、虚脱状態から顔をあげた時、も
はや日本第一のサックス奏者になる等、
どうでもよくなりました。眼の前には、
ロリンズだけが燐然と輝いておりました。
しかし、それからといふものは、練習

すればするほど、「ロリンズ」は、僕から次第に遠ざかって行きました。やればやるほど、思っていることは正反対のものばかりが流れ出ました。

（俺は、もう駄目だ！）

（俺という男は、これまでなんだ！）
そんな毎日が一年間つづきました。

彷徨の中にあって、

（誰もいない山の中で、一人になりたかった）

たゞそれだけのことでした。そんな場所を、たまたま母が教えてくれたことに

よって、身延山の青年講習会に参加したまでのことにすぎなかつたのです。

ところが、この偶然が、僕の一生を大きく変えてしまつたのです。そこで、とんでもない人におあい出来たからです。それは講習会の副主任をされていた日高白象上人その人でした。

III
忘れもしない昭和三十七年、大學三年の夏八月、前述の如く第二回身延山青年行学講習会に、初めて参加しました。

時折、父母から日蓮宗のことについて

色々と話しあ聞いていましたが、僕には

信仰心などカケラもありませんでした。

当時の僕は、自信の喪失と孤独、沈落

（青年行学講習会といつても若い者は僕一人で、あとはみな老人ばかりだろう）

と思っていた所、各地より集った講習生の中に、数十名もの青少年男女がいたのには驚かされました。

講習中、東京の大石講青年会の方々と仲よくなり、その方々の純粹さと素朴さに触れた時、生き返ったような気持がしました。

もともと誰も彼もが、やたらに有難がつてゐる氣持だけは、どうしても理解することは出来ませんでした。誰の話しを聞いても、その内容からは日蓮大聖人の偉大さも、お釈迦さまの偉大さも、感じ取ることは出来なかつたのです。

ところが講習会日程の最後の日、朝未明の中、西谷旧草庵の石だたみに端坐し

て唱題修行をする時、我れにもあらず涙ボロボロこぼれ落ちて来るではありますか。これには驚きました。

「これは一体、何だ!!...どうしたというのだ!!」
「俺ともあろう男が、訳も判らぬ涙を、俺の如く流すとは!!...」

「へちくしよう!!こんな馬鹿な話しが。」
「いくら、そう思つてみても、あふれる涙は、どうすることも出来ませんでした。そしてその日、遂に日高上人の登場となつたのです。

それは講習会最後の講義でした。講題は「良寛さんと放鴻鳥子」というのでしたが、その講義の内容は兎も角も、時々、講義の切れ目、切れ目に語られた日高上

人御自身のことが、まるで原爆の爆風の如く、僕をして壁に、完全にめり込むほど強烈に、たきついたのです。

へんな、こんな物凄い男が、これほどおそるべき男が、この世の中に、しかも日本の国の中にいたとは！！！！

「ソニー・ロリンズより、はるかに素晴らしい超人が、こんな身近かに、いらっしゃったとは！！！！」

「そうだ、これだつたんだ！！ちくしよう、俺は今まで何をしていたんだ！！」

八

と同席し、前夜につといて一睡もせず語りあいましたが、その時、全く偶然、僕の前の席に坐っていた同じ立正靈山会青年部の榎本蓮子という女子大生が、後に思いもかけぬ仏縁の発端となってくれたのでした。

夜行列車から降り立った時、出発した時の、激しい自己嫌惡も、寂莫とした孤独感もありませんでした。帰宅して母にたゞ訳もなく、「有難とう、有難とう」の連発でした。

「出発してから丸五日間、合計六時間の睡眠で、最後の一「日間は、一睡もしていられない」

V
講習会もすみ、関西の故郷へ帰る列車の中で、前日徹夜で語り明した奈良の立正靈山会青年部の幸野好修という好青年

て寝床をとつてくれましたが、床に入つても、なかなか寝つかれませんでした。

やがて、むくむくと起きあがって、葉書一枚に感謝の言葉をつらね、日高上人に出しました。

ところが、如何に講習生であったとはいえ、個人的に親しく話しをしたこともない青二才の一枚の葉書に対し、便箋十枚にも及ぶ長文のお手紙が返されて來たのです。この時の驚きと嬉しさは、とても言いあらわすことは出来ません。

それから一月の後、榎本喜子さんの招待をうり、奈良の立正靈山会の道場へお参りしました。そこで遠山金子先生の指導されている靈山会青年部の美しい集いに、内心驚嘆したのです。そして遠山先

生が、日高上人を大変よく御存知なことに二度びっくり。

その日帰り列車の中、
「そうだ、青年会だ／青年会を自分のお寺にも作るんだ」

と感じました。

翌日、さっそく菩提寺の常照寺を訪ね住職谷口宗敏上人に、龍野市立正青年会の結成をお願いしました。谷口上人も大へん嬉ばれ、青年会結成のため努力されました。然し、前例もないと故、なかなか巧くまいりませんでした。

VI

年あけて昭和三十八年正月、日高上人を隊長とする身延山街頭布教別動隊の学

生僧が二十数名、冬休みを返上して、日

に……。

蓮大聖上人が青年時代山家学生式にのつ
とて十二年間、遊学研鑽された比叡山、
横川常光院の聖地参拝を皮切りに、京都、
奈良方面の行脚布教に来られることとな
りました。僕も法鼓をもって立正靈山会
の青少年五名と共に終始お供しました。
講習会以来、四ヶ月ぶりにお目にか
る日高上人のお姿に、如何に心おどった
ことでしょう。

僕には、その当時なお、お釈迦さまも
大聖人もありませんでした。ただ覚えた
いと思う自我偏の経文を、通学電車の中
で暗唱してはいましたが、たたたた日高
上人という、僕にとってローリングスに取
つて替る超人の、お供がしたいばかり
の勝手に決め込んだ僕は、日高上人よりの
お手紙欲しさに、手前勝手をお便りを、

僕の直感は、寸分も違ってはいません
でした。いや厳密には全く違っていたもの
のは、僕が考えていたことよりも、気も
遠くなるほど遠大なものだったのです。
日高上人は、正しく常識では考え方
ない世界の人そして日蓮大聖人は、全く
ケタはずれのお方だったのです。

「ミスター・日蓮!!」

大声で叫ばずにはおられないほど、恐
しいばかりに素晴らしいお方だったのです。

その後、日高上人を（我が心の師）と
勝手に決め込んだ僕は、日高上人よりの
お手紙欲しさに、手前勝手をお便りを、

どんどん差しあげ、法華經を、少しつつほんの少しつつ、かじって行きました。日高上人よりのお手紙は、驚くべき素晴らしさ溢れるものばかりでした。

VII

しかし、龍野における青年運動の氣運は、一向に盛りあがる気配すらありませんでした。

春三月、第三回身延山青年行学講習会に、再び参加した僕は、その座談会の時「法華經による青年運動が、如何に困難であるか」

ということを訴えました。この時、日高上人は、

「春にまいた種は、夏に花を咲かせ、秋

に実を結ぶ。時は待たねばならない。今は、たとえ一粒の種であっても、この種を大切にしなければならない。時が来れば必ず龍野の地にも、青年運動の花は開き、実は結ばれるであろう。」

と答えられました。

果せるかな、夏八月、夏休みを返上した身延山学生布教別動隊が、豊橋、名古屋、四日市、そして奈良・大阪・神戸と街頭布教を展開する、そのスケジュールの中に、我が故郷龍野の布教が組まれていたのです。

常照寺谷口上人の、青年会結成の一念に、遂に仏天が動き、こゝに身延山布教隊をお迎えすることとなりましたのであります。

龍野では常照寺において一泊一日の青年行学講習会が開催されました。それは兵庫県西部宗務所、ならびに管内四十三ヶ寺の寺院・護持会の総力を結集したものでした。この壮舉は、まさしく地方における正法広布の、のろしであつたのではないでしょうか。

それ以来、谷口上人のもとに、さうやかながら青少年の集いが始まりました。「僕たちの青年会は、何をなすべきであるか」

といふことが論議されました。そして青少年むきのリクリエイションもさることながら、結局

「給仕第一、信行第二、學問第三」という宗門の清規にのっとり、法華經

の本仏釈尊、日蓮大聖人、諸天善神に対する給仕、先祖に対する報恩を本としてお題目を写經し、これをもって川施餓鬼供養を毎月行うという仏事を中心とすることになりました。

立正安國論に引用された仁王護國經の經文には、

「國土亂れん時は、先ず鬼神乱る。鬼神乱るゝが故に万民乱る」

と示されてありますが、國土も家庭も所詮同じことです。家庭に不幸があるのは、先祖の靈が幽冥にさまよっているからであり、先祖の靈が成仏しない限り家庭の平和はありません。引いては國家の平和もあり得ないのです。

従つて、立正平和のためには、大きく

は世界全体に正法を立てる事、小さく
は一人一人が、みずから仏道を行ひ、ま
ず自分の先祖の成仏を祈り、次に無縫の
靈の成仏を祈らねばなりません。靈に対
する供養には、お題目にすぎたるもの
ないのです。

僕たち有志は、全員、半紙十六分の一
の紙にお題目を書き、各自一ヶ月一千枚
を写経して、例会に持つて集まる事を
決めました。谷口上人をはじめ小学校五
年生の児童に至るまで、一勢に始めまし
た。

このことは龍野の町に大きな反響を呼
び起しました。青少年の父兄は、驚いて
子供の写経を手伝い、隣り近所の人々や
これを伝え聞いた人々までが、信仰の如

何を問わず、

「そういう良いことなら、自分の家の子
供も加わえて欲しい」

と親から進んで参加を申込んで来まし
た。龍野の町に流れる清流には、先祖の
菩提をともらう青少年の、喜々とした姿
が月ごとに増えて行きました。

春にまいた一粒の種は、文字通り夏に
花を咲かせ、やがて多くの実を結はうと
しているのです。

■

「祈りなき平和はあり得ない。敵をも祈
る常不輕菩薩の、人間礼拝に徹すること
こそ、信仰実践の極地である」

とは、日高上人の常日頃のお話でし

た。ところが「すべての人々に祈る」という、この言葉に酔っていた僕は、話しえならない青一才だったのです。

日高上人のおっしゃる「祈り」とは、如何に恐るべきものであるか、といふ一端をのぞいて、愕然と身ぶるいする日がやって來たのです。

昭和三十八年夏八月の第四回身延山青年行学講習会に参加すべく、出発せんとするその前日、たまたま立ち寄った友人の家で、驚くべきテープを聞き、ふるえあがるほど恐るべき写真を見たのです。それは、その年八月、広島における原水爆禁止世界平和大会で収めて來たものでした。

一九六三年の原水禁世界大会、それは

何という愚かな醜態だったのでしょうか。

全日本人、いな全人類が等しく、心から祈りを捧ぐべきはずの場所で、中ソ論争をめぐって対立した日本の両派が、互に相手側の参加を拒否し破棄しあって、会場に網を張りめぐらし、被爆者や遺族の方々をもしめ出して、まるでヤクザの縄張り争いを演じたのです。

それに一枚加わった猿廻しが全学連でした。原水禁の祈りの声明ですが、「へイワ、ヘイワ」の連呼で打ち消していたのです。

何ということでしょう。何という人間どもでしよう。この姿が、平和を願う人々の実態なのです!! こういうことで、どうして平和がもたらされましょ!!

テーブには、被爆者の老人の声がふるえていました。

「何も申しあげることはありません。御覽の通りです。私は妻子を原爆で失いました。私もやがて腐れ果てゆくでしょう。今日、私は入りたくとも、慰靈塔の側へは入れてくれません。被爆者であり遺族でもある此の私がですよ!!

我々に對して、政府が、いな日本が一
体、何をしてくれました?

私は神仏の存在を認めます。そして実在する、その神仏を呪います!!

そして呪いの神に願つてゐんです。もう一度だけ、日本に水爆を落してくれと。

落ればいいんだ!!十八年間の私たちの苦しみが、如何に恐しいものか、その時

はじめて判つてくれるでしよう」

それは、はらわたのねじ切れるような血をしぶる絶叫だったのです。この老人に対しても、

「貴方は、前世において、それだけの業がある。誘法の罪を犯していました。日蓮大聖人様の眞の教えを説いてあけましょう」

などと、悟つたようなことを言う者がいたならば、僕は即座に、そいつの心を叩きつぶしてやる。これほど、あわれな方が、この世の中に居てよいものでしょうか!!

よく人は言います。

「見捨てられた人々のために、私は法華經を説きます」

と。しかし、眞に見捨てられた人々が如何なる人々なのか、貴方に判つてゐるのですか!!

原爆が、広島や長崎ばかりでなく、若し東京に、大阪・神戸・名古屋に、そして日本国中の主要都市に投下されていたらば、この僕が、そして日本人の誰もが、全身ケロイドにひきつれ、一つ目の子供や、背中に手のある子供や孫を生んでいたのです。

テーブルに次いで広島原水禁大会の写真を見た時、日高上人に最初おあいした時と同様、一大爆風にたゞきつけられたらうな思いをしました。
それは畳一枚の大きさに写された老婆の写真でした。会場で大騒ぎする猿やゴ

☆ 教義説明：平和の祈り ☆

一六

祈りなき平和はありえない

敵をもへつくしむ心を深めよ

永遠の光りはその祈りより生ず

一九六二年、インドのニューデリーで核実験反対世界平和会議が開かれました。各国代表はそれぞれの平和議案を提出しました。議場は討議採決をめぐって騒然としました。この時、日本

代表の藤井日達上人が申しました「如何に立派な議案でも実行されねば一場の遊戯にすぎない。実行には祈りがなければ遂行出来ない。祈りなき平和はありえない」議場は肅然としました。

リラに向って、地べたに土下座して合掌している驚くべき老婆の姿でした。愕然として真青になつた僕に、友人はオロオロするばかりでした。

ケロイドにひきつれた老婆の横顔こそまさしく常不輕菩薩の姿だったのです。日高上人のおっしゃる日蓮大聖人の「祈り」とは、まぎれもなく此の老婆の姿だったのです。

X

それまでの僕は、身延山の講習会以来いゝ氣になって、「祈り」という言葉を誰れ彼れかまわらず、言って来ました。そして自分自身、

「創価学会の人々に対してさえも、その

無知説法の心をあわれと思って、却つて彼等のために祈るべし」

と思い込んで、事実、そうして参りました。しかし僕の、そうした祈りなど「祈り」でも何でもなかつたのです。そこには一片の懺悔すらなかつたからでした。

そうです。懺悔だったのです。最も必要不可欠なものは、懺悔の上に立つ「血の涙の祈り」だったのです。

身延御在山九ヶ年間の、大聖人の忍苦の御生活は、蒙古大襲来という未曾有の大國難を眼前にして、日本全土の誇法の罪を一身に背負い、全國民に代つて本仏釈尊に懺悔祈禱される御生活であり、懺悔に明け、悔に暮れたのでした。

たのです。

たしかに大聖人は至孝第一の聖者でした。しかし、たかゞ御両親を追慕するくらいのことです。
「未来際までも、心は身延山に住むべく候」

とは、決して仰せられるはずはありません。また弟子の養成や、報恩感謝のためだけの御生活であれば、「我れ日本の柱とならん……」

という三大誓願は、大聖人の晩年、身延御在山中の何処に生きてくるのでしょ

五年九月八日、はじめて身延山を出られた大聖人が、同年十月十三日、はからずも池上の地において御入滅されるに際して、

「墓をば身延山に建てさせ給え」

と御遺言された所以のものは、身延山こそ大聖人が九ヶ年もの間、國民のすべての罪を一身に背負つて懺悔懲禱された山なればこそ、こゝに墓を残し、魂を留めてまで、末法万年の一切衆生全人類の行く末を見護らんとされたからでした。

「鳥と虫とは泣けども涙あらず、日暮、泣かねども涙ひまなし」

とは、身延御在山九ヶ年間におりる

「祈り」に関する恐しい例が、その後に

も起りました。南ベトナムにおける仏教

弾圧が、意外にもクーデターによつて、
その幕を閉じたことです。

ゴ政権に対し、七人の僧侶が、命を
捧げて祈りました。みずから体を灯明
として仏に捧げることによって、ゴ政権
が速かに反省し、国民の上に平等の光り
かもたらされるよう、みずから石油をか
ぶり、火を放つて、次々にみずからの体
を焼身供養して行きました。

しかし、無残にも、その結果は、ヤク
ザのなぐり込みにも等しいクーデターで
した。命を捧げた七つの祈りは、果して
ゴ・ジンジエム一党を蜂の巣にすること
だったのでしようか？……対岸の火事
ではないのです。

X

日高上人に初めておあいしてから早や
一年五ヶ月、その間、僕の得たことは、
たゞたゞお題目とは（唯仏与仏のもの）
であつたのだという、そのことだけでし
た。

そして、この一事が、如何に素晴らしい
如何に氣も遠くなるほどの遠大さであつ
たことでしょう。

真正の妙道は、

悟りて知るべき法ならじ。

修すべし、求むべからず。

といふ大和葛城の一禪師の言葉も、ま
さしく此の（唯仏与仏）の境をいうので
あります。

「お題目を唱えるのに、自分自身の如何

なる計らいも力も加わえてはならない」
とは、日高上人の日頃の申されようで
す。

一切に超越し、しかも一切に潜在しゆ
く絶対のお題目であればこそ、このお題
目の一念、本仏釈尊の一念心に住する時、
一切の対立は消化され、万物、万法その
所を得て、一大円融の大マンダラ法界が
実現して来るのです。

正法のため、真に苦しむ人々のため、
お役に立てるならば、これこそ、この世
に生をうけた生甲斐であり、今生一期の
思い出となりましょう。

XIV

全人類の危機は、昭和三十八年を境に
その警鐘乱打が、一段と激しさを加わえ
て参りました。我等、日蓮門下の青年が
立ちあがらねばなりません。釈尊の如く
大聖人の如く、そして近くはインド教済

中に、人間開花の実を、乃至一人の上に
おいても結ぶことが出来るならば、これ
にすぎた幸いはありません。
部落民であるが故に自殺してしまった
ガールフレンドや、三川坑の大爆発のの
ち、三池より出て来て、病身故に子供共

々自殺したヤキイモ屋のおばさんのこと
を思うにつけても……。

菩提寺常照寺に集い来つて、お題目の
写經に励む小学校五年生の坊やも、必ず
や立正安國の道を行く大人に成長して行
くことでしょう。

今日も龍野の清流には、靈供養のお題
目の紙が何千枚と、ゆるやかに流れてい行
きました。

(昭三九・一・八 記)

申込　身延山布教部
　　日高白象
　　その他

第五回

身延山青年行学講習会

時期　三月廿六日～廿九日　三

場所　身延山西谷信行道場

会費　一千円（参加自由）

講師　主任一奈良宗務所長大島

　　鳳靜

副主任一身延山布教部

〈我が出家の動機〉

お題目は生きている

——第二回——

〈妙とは蘇生の義なり〉



日蓮聖人は母君を蘇生せしめて四ヶ年の寿命を与えられた。筆者は死後十時間もたつて生き返った。これはその奇蹟的体験にもとづく生きしき物語である。

身延山大学3年

浜 島 法 立

5

それは昭和十一年、春三月の頃のことでした。当時、小学校の五年生であった長男の豊兄さんが、病床にふすようになりました。医者の診断では、心臓弁膜症ということでした。

五月に入つて、病気は急に重くなりました。床に寝たつきりの症状となつて、医者も

「助かる見込みはない」

と診断を下しました。

その頃から、もう豊兄さんは、母以外の人には、父であろうと、医者であろうと、誰にも自分の体に手をふれさせようとしませんでした。

それは病人の我が儘というよりも、む

一一一

しろ病人自身、自分の死期を達観でもしているかのようにさえ思はしめられるものがありました。

弟の私から言えば、何だか変ですが、父母の語る思い出によれば、豊兄さんは学校でも優等生であつたそうです。そして子供に似あわず、普通の子供たちと違つていて、言うこと、なすこと、言語動作のすべてが、賢いというよりも

「これが子供か」

と疑われるくらい大人びていて、親の目からも、不思議に思われるほどであった、ということです。事実、学校でも、「神童とは、こういう子供のことか」とうたわれていました。近所でも、大人の顔まけするようなことが、つくろ

わない豊兄さんの日常でした。

父母も、そうした我が子を誇りとするよりもむしろ無気味にさえ感ぜしめられることがあつたということです。

そうした豊兄さんが、時も時、それで訳の判らない病氣で入院していく父が一家こぞって法華經の信仰を始めるやいなや、不思議にも、みるみる中に回復して、六年ぶりに退院することが出来た、と安堵するのも束の間、まるで父と取つて代るよう、心臓弁膜症という病氣にかかり、しかも重態に落ち入ってしまつたとあっては、信仰心のない者にさえ感ぜられるようだ。

「何かしら、目にみえない、大きな因縁の糸にでも、あやつられているのではないか

としか思われませんでした。

その上、医者がサジを投げ出した頃より、もとより本人は、そろとは知らないながらも、母以外の人には、たとえ父にも医者にも、自分の体をさわらせなくなつたということには、一層その感を深くするものがありました。

それだけに母は、父の病氣の時にも増して、病人の枕もとに付き切り、昼夜、絶え間なく、一心不乱にお題目を唱えては、ひたすら仏天に感應守護を念じつけました。死の宣告をうけた以上、法華經にすがる以外、もはや何ものもなかつたのです。

先きには六年間もの間、病名すら判ら

ぬ父の看護をつづけ、やっとこれが良くなつたと思えば、今度は長男の、医者にも見限られた危篤状態、退院したばかりの父は、まだ普通の健康にはもどつておらず、小学校一年に通う次男の邦博兄さんと、生れたばかりの孝子姉さんを抱えた母の心中は、如何ばかりであったことでしょう。

精も根もつき果てゝ
（死ぬにも死にきれない）

といふのが、当時の母の、本当の心ではなかつたでしょうか。天をうらむにしても、その天にしか、すがるすべもなくつた母……つくづくと、人間この生きる者の業の深さに、涙もかれる思いをしたことでしょう。

貧苦・病苦にあえいで来た母、やみあがりの父と、危篤状態の長男、そして二人のおさな子を抱えた此の母に、若し法華經の信仰というものがなかつたならばおそらく生きる希望も力も失い、毎日の新聞紙上、その三面記事の片隅に報せられてゐるようだ、一家心中を計らざるを得ない衝動にさえかられて行つたことでしょう。

しかし母には、誰から見放されても絶対に見放されない最後の依り処がありました。

それは六年もの間、貧苦にも病苦にも堪えぬいて來た母に、最後、天より与えられた法華經の信仰でした。時に母は三十一才でした。

母は、我が心もくだけよとばかりに、危篤状態の長男の上に祈りつけました。然し、その祈りも空しく終る時がきました。

6

それは、この年の五月二十二日、午前十時すぎのことでした。豊兄さんの枕もとには、たまたま往診に来た医者と、父と母とが見護っていました。

母は、当時まだ赤ちゃんであった孝子姉さんを、ふところに抱いていました。小学校一年生であった邦博兄さんは、まだ学校から帰っていませんでした。この時です。豊兄さんが、病いの床についてから、およそ三月ぶり、始めて床の上に起きあがつたのです。それは誰か

ら起されたものでもなく、自分から一人で、むくむくうと起きあがったのでした。医者も父も母も、亞然としました。瀕死の重態にある子供が、病苦を訴えこそれ、自分から、むくむく起きあがらうとは、夢にも思われないととてあったからです。

たとえ、ハツと氣付いて、
「駄目だよ、豊ちゃん、起きたりしては

静かに寝ていなければ……」

と制しようとしても、それさえはどう毅然たるものだ。豊兄さんの日にも口もともも、そして体全身にみなぎっていました。それは最早、瀕死の病人の姿ではありました。それは医者に向って挨拶しました。

豊兄さんは、きちんと床の上に正坐し

ました。オマキの襟を正し、両手を膝の上におき、胸をはり、顔をあげ、正面から父母の顔をじっとみつめました。「お父さん、お母さん、大へん長い間、お世話になりました」

豊兄さんは、両手をつき、頭を深く垂れて、心からお礼をのべました。言葉ははつきりしていました。動作は泰然としていました。

父母は、あまりのこととに驚き、目をみはるばかりでした。そして、

「これが今生の別れの挨拶をしてくるのだ……」

と感するや、どつと涙があふれ、はげしい嗚咽にむせびました。豊兄さんは、今度は医者に向って挨拶しました。

「先生、長い間、どうも有難うございました」

した

医者も、頬つとう涙と共に、大きく何度も何度もうなづきました

(坊や、良い子だったね)

と言おうとするのも言葉にはなりませんでした。ようやく心を落つけた父が、

「豊よ。……邦博が、まだ学校から帰っていながら、お前も、もう一目あいだからう。これから学校へ行って、呼んで来ようか」

と尋ねました。然し豊兄さんは、静かに、かぶりをありました。

「いえ、いゝのです。邦博ちゃんは勉強ですから、勉強のさまたげをしてはいけません。学校から帰って来たら、大

きくなつて、立派な人間になるように、と僕が言つていた、と伝えて下さい。そ

れだけ伝えて下されば、よいのです」

大人も負かすような豊兄さんの臨終の言葉は、更につづきました。

「お父さん。お母さんは随分ながい間大へんな苦労をされました」

母は、たまりかねて泣き伏しました。父も涙をおさえて、わなわなきました。

「お父さん。……」

豊兄さんの言葉は、静かでした。

「お父さんも早く丈夫な体になつて下さい。そしてお母さんを楽にしてあげて下さい。仕事を始めて、興々も無理をしないように。……」

学校の先生や、お友達には、お父さん

から、よくお礼を言っておいで下さい」

そして今度は、母に抱かれている赤ちゃんの孝子姉さんに向って、長男として言ひ聞かせました。

「孝子ちゃん。。。孝子ちゃんは赤ちゃんだから、今は何も判らないけれど、大きくなったら、邦博ちゃんと仲よくして、お父さんやお母さんに孝行して下さい。僕の分も、孝行してネ」

と言い終るや、豊兄さんは合掌して、「南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經」

と、お題目を唱え始めました。父も母も一緒に合掌唱和しました。医者も深く頭を垂れて合掌していました。

死にゆく子供と、これを見送らねばな

らない親たちが、今はのきわに、互に向いあって、最後のお題目を唱えあつたのです。

唱題中、とめどもなくあふれる涙は、二条の滝の如く、親たちの両の頬をぬらしました。母の唱題は、幾度か嗚咽に途切れました。

ものの十分も、お題目を唱えでしょうか、フットと豊兄さんのお題目が途絶えました。ハットした父母は、思わずお題目をやめました。そして穴のあくほど豊兄さんを凝視しました。

数秒の間、それは天地の一切の運行が停止してしまったかのようない怖い時間でした。秒をきざむ時計の音さえも止つてしまつたようでした。

豊兄さんの正坐した姿勢も、合掌した両手も、微動だにしませんでした。口は真一文字に固く閉ぢられていきました。たゞ両眼だけが、焦点を失ったように開かれていました。

然し、その両眼も、スローモーション映画の一駒のように、静かに閉ぢられて行きました。大きな、深い、息を一つしました。それっきり、息は絶えてしましました。

医者が、思わず乗り出そうとしました。その時です。こと切れた豊兄さんが、両眼を閉じたまゝ、「お母さん！」

と呼びました。そして後は、一息で申しました。それは、まさしく生ける魂が

死せる唇を動かして語る言葉でした。「お母さん、もう泣かないで……僕は、仏さまの処へ帰って行きます。

お母さん、さあ、笑って……。

お母さんは今まで随分と、色々な苦労をしたけれど、もうこれからは、何の苦労もないんだよ。

ホラ、まわりが真っ赤だよ、美しい光りが、あたり一面に輝いているよ、見てごらん。ホラ……。

」
と言ひ終るや、にっこりとほほえみました。これが最後の言葉でした。そして一度と語ることもなく、息をつくこともありませんでした。

微笑をたとえたまゝの頬は、紅をはいたよう輝いていました。正座した膝も

崩さず、合掌した両手も崩さずに……。これが豊兄さんの最後の姿でした。

おそれかしこむような唱題中、父と医者とが、豊兄さんの屍を、両脇からそつと、だきかゝえるようにして、静かに、

流れていきました。
「御臨終です」
医者が、静かに脈をとり、瞳孔をしらべ、心臓にも聴診器をあてました。
そういう医者の言葉も、さすがにふるえていました。
今は屍となつた豊兄さんの姿、それはなお生きる菩薩像そのものへようでした。
父母は、その姿を礼拝するように、静かにお題目を唱えはじめました。
子を失つた親の、この痛哭きわみなき悲しみ、それはそれとして、この臨終の場には、人間界を超えた、何かしら大

き聖者の臨終も、かくやとばかり思はしめられるような、豊兄さんの最後の言葉

や、その姿を、まのあたりにした父父母は、
我が子を失つた悲しみもさることながら
それよりも、なお、

「我が子は、もはや我が子ではない。み
仏の子として、親のふところから、み仏
のふところへと帰つて行つたのだ。」
といふ宗教的実感の方が、より大きか
ったのでしよう。

豊兄さんの枕もとに供えられた香爐が
らは、一筋の香の煙りが、ゆるぐことも
なく、まっすぐに立ちのぼっていました。

「あが小学校五年生、十二才の子供の
臨終と、誰が、どうして信ずることが出
来ようか。」

「おのが寿命を父に捧げ、父に代つて死
んで行つたのか。」

「それとも、法華經の尊さを、死をも
ってしても示すべく、そのように生れつ
き、そのようにして死んで行つたのか。」

父母は色々と考えました。然し、どの
ように考えても、所詮、心をみたすこと
は出来ませんでした。

「仏の世界は、仏にしか判らないように、
凡夫の心では、豊兄さんの臨終に示され
た仏の計らいのすべてを、領解出来るよ
しもありませんでした。」

「豊は、なぜ死んだのか」
「どうして、あのような尊い臨終を迎え
たのか」

に大きなショックを与えた。特に母には、
その生涯を一転せしめるほどの契機とな
ったことは確かでした。

母は、明けても暮れても、今は白木の
位牌となつた豊兄さんの靈に向って、お
題目ばかり唱えつづけました。

その母の眼にうつる位牌には、豊兄さ
んの端座合掌して、こと切れていた時の
姿が、何時も重なつて浮んでいました。
また母の耳朶には、

「お母さん泣かないで……」

といふ豊兄さんの最後の声、

「ホラ、まわりが真っ赤だよ、美しい光
りが、あたり一面に輝いているよ、見て
ごらん、ホラ……」

といった魂の声が、こびりついていま
うとしたのだ

した。やがて、その声は、臨終の時、豊
兄さんと一緒に唱えたお題目の声と共に
耳朶から心へと響いて来ました。

▲ そうだ！

母は、心の底から、勃然として湧き起
るものを感じました。

▲ 豊は、仏さまの世界へ帰つて行つた。
それは美しい光りに、みちみちた輝かし
い世界だった。豊は、その世界を、まの
あたりに見た。そして私にも、

「見てごらん、ホラ……」

と、指さすように言つたではないか

▲ 豊は、十二年という短いながらも、そ
の全生涯を賭して、このみ仏の光り、み
仏の世界というものを、この私に示めそ
うとしたのだ

「そうだ、私は、豊のこの畢生の願いに
こたえねばならない。そして……」
「豊が、まのあたりに見た仏界の光明を
豊の見たまゝに、我れと我が身に感得し
なければならぬ」

「また、その光明を、豊が私に伝えよう
としたようだ、私もまた、多くの人々に
伝えねばならない」

「お題目の光明、その中にこそ、豊のま
ことの命は生きている」

「そのように思い当つた時、これまで、
むなしかった母の胸に、なくなつた豊兄
さんの生命がよみがえり、やがてそれは
大いなる新生の息吹きとなつて、母の全
身に、波紋の如くひろがつて行きました。
母は、

「我が子が、み仏の光明の中に一如して
行ったように、自分自身もまた、我が身
を法華經の中に投げ入れて、法華經に身
をまかせよう」

と決心しました。そして、
「豊よ、お前の死は、この母が、決して
無駄にはいたしません」

と、仏壇に誓つたのでした。

それからの母は、家事一切をもかえり
みず、文字通り、心魂をお題目に打ち込
んで、夜も昼も、ぶつ通しに唱えつづけ
ました。

母が真剣になればなるほど、また信仰
の至らしさを悔すればするほど、唱え
るお題目の声は、ますます樓櫓をきわめ
て行きました。

さすがに父も

「それほどまでに、しなくとも……」

と反対するようになりました。近所の

人々からは、

「子供が死んだので、気が狂つてしまつ

た」

と、さげすされました。

「狐がついたのだ」

とも、のゝしられました。

然し母は、そうした言葉に耳もかさず

ひたすら唱題修行に専念しました。やが

て家中での修行ばかりでなく、白の行

衣を着、ウチワ太鼓をうって街頭でも修

行するようになりました。

母の修行日課は、雨の日も、風の日も
休みなくつづけられました。それは堂議

では考えることも出来ないほど、きびしい修行の連続でした。

この母の修行を励ましたもの、それは豊兄さんの臨終最後の言葉と、その姿、そればかりであつたことは言うまでもないことです。

幸いにも、父が、もと通りの丈夫な体となり、豊田自動織機会社に復職して、会社員として出勤するようになります。家計もだんだん良くなつて来ました。

その頃より、母の強盛な信仰にひかれ、何処からともなく信者の人たちが私の家に集つて来ては、一緒に唱題修行をするようになりました。そして一人一人、苦しみから救われて行きました。

然し母は、俗にいう「オガミヤ」とか

「行者」「祈禱師」になるといったような考え方には、毛頭だにありませんでした。また信仰によって家計を助けるとか、道場を建立するといったような考えすらもありませんでした。

母が一途に念願していたことは、み仏の光り、お題目の尊さ、それを乃至一人の人にもお伝え申しあげる、ということばかりであったのです。

五月二十一日、さうやかながらも豊兄さんの十三回忌の法事をいたしました。やがて夏もすぎ、十月ともなれば、戦後復活したばかりの、町の秋祭りが、近づこうとしていました。町中は、お祭りの準備で、何となく、あわただしい気分でした。

そうした中にあって、今度は私が、普つての父と同じように、病名すら判らない病気にかかってしまったのです。

初めの中は、カゼでも引き込んだような症状でした。ところが微熱が一週間ばかりつゞいた後、急に引きつけ始め、意識不明に落ち入ってしまったのです。

かゝった医者は、同じ刈谷市内の鈴木内科医院の先生でした。医者も付き切りで、一時間おきに注射をしました。然し

豊兄さんが亡くなつてから十三年目、慘烈な第一次世界大戦もすぎて、敗戦後の虚脱と窮屈に混乱していた昭和二十二年、この年、邦博兄さんは二十一才、孝子姉さんは十三才、私は六才になっていました。

病名さえ判らない私の症状は、みるみる中に悪化して行きました。そして豊兄さんと同じように、

「助かる見込みはない」

と言われる時が来ました。

兄弟四人の中、長男の豊兄さんと末子の私までが、助かる見込みもない危篤状態となり、長男はそのまま死んで行き、三男の私は、なお意識も不明のまゝ、晦明の間をさまよっていたのです。

へこの子だけは救わねばならない。豊の時と同じような、十三年前の因果が、再び繰り返えされるようなことであつてはならない。

母は必死にお題目を唱え、唱えてはお数珠で、私の体をさすりました。然し、

その甲斐はありませんでした。とうとう最後の時が来たのです。

「亡くなりました」

医者は静かに告げました。さすがの母も、がっくり、うなだれました。然し過去十三年間、お題目を唱えぬいて来た母法華經に身をまかせ切って来た母は、少しも取り乱すことはありませんでした。

母は、静かに私の枕もとを立ちました。

そして仏壇の前に端座しました。
△三宗 諸天善神さま、我が家の、この因果の苦縛をほどきたまえ

△十三年前、豊の臨終の時に、お示じになられたみ仏の光りは、死後の淨土におけるばかりでなく、現世の婆婆の苦惱の上にも、輝やかさせたまえ

△三宝、諸天善神さま、私は、み仏の光
りを仰ぎながら、この光りを一人でも多く
の人々にお伝えしよう、と決心してか
ら十三年間、私は私なりに、ひたむきな
精進をさせて頂いて参りました。』

△然し私の罪業、我が家の罪業が、あま
りにも無量深重であつたことを知ら

されました。『まだ我が子にさえ、み仏
の光りを伝えることも出来ず、十三年前
と同じ因果の中に、再び我が子をあの
世へ見送らねばならなくなってしまった
からでござります。』

△懺悔しようとも懺悔出来ないほどの無
量の罪業、若し懺悔出来ますことならば
今こゝに悉く懺悔させて頂きとうござい
ます。』

△三宝、諸天善神さま、何とぞ、能く懺
悔出来ますよう、お導き下さい。そして
私の悔をうけさせたまえ。』

△若し、この子に、死に至るほどの罪業
があるならば、たとえこのまゝ死んで行
くにせよ、その罪業は悉く、母の、この
私の身に代らせたまえ。』

母は、五体投地して懺悔しました。そ
れは眼底よりも、全身の毛穴よりも、血
を吹き出すような懺悔でした。母の全身
は、頭のてっぺんから足の指先きまで
びっしょり汗にぬれていました。

△お釈迦さまの教えによれば、
「大懺悔は、眼底と全身の毛穴より血を
吹き、中懺悔は、眼底より血、全身より
汗を吹き、小懺悔は、眼底と全身より汗

を吹く」

と示されています。母の懺悔も、おそらくこれに類するほどのものではなかつたでしようか。

随分長い間、身動きもせず、仏壇に向つて伏拜していく母は、やがて体を起すや、それこそ血をはくようなお題目を唱え始めました。それが懺悔に徹したお題目であったことは申すまでもあります。

既に、私の体は硬直状態を来していました。母は依然として唱題をつづけていました。集つて来た人々は、あまりにも意外な光景に啞然としてしまいました。何故ならば、既に、しめやかな通夜の用意がされていくべきはずのものであつたからです。

「葬儀屋は、どうした。早く呼べ！」

親戚の一人が、どなりました。然しあい家の内、その中央正面の仏壇の前に、デンと母が座り込んでいる以上、家に棺桶の入れようもありませんでした。

その中、医者は去り、父は親戚一族の家々へ、末子死亡を打電しました。数時間後、喪服にあらためた一族の人々があわただしく集つて参りました。

婆を尻目に見ながら、

「何時になつたら、葬式をするつもりなんだろう」

「近所手前、きまりが悪いつたら、ありやあしない」

などと、ひそひそ批難しあつていました。その中、父方の一方が、肚をすえかねたようだ、つかつか母のそばに来て、「子供が死んだといふのに、死んだ子供も、ほっぽらかして、自分ばかりお題目を唱えておるとは、一体、何ごとか！」それでもお前は、人の親なのか!!」
と、大声を立てゝなじりつけました。
母方の人々も、聲をたたいてつめよりました。

「お澄！」

母の名は、澄子といつたのです。

「お前は、念佛の家に生れて、念佛で育つていながら、どうして、お題目のようない、けつたいなもの唱えるのか」

「お題目なんかで、死んだ子供が、生きあがるとでも思つてゐるのか」

「そんな妖術めいた信心をするのなら、万が一、たとえ子供が生き返つたとしても、今後、親戚すきあいは一切ことわる。いやか！絶交だぞ！」

然し、誰から何と言われようとも、母は眉一つ動かしませんでした。むしろ母の素顔は、懊悔の涙に洗われて、すがすがしいばかりに澄み切つていました。唱題は、なおも正念不動のまゝに続けられました。

親戚の人々は、にがにがしい顔をしながら、所在なげに、黙念と私の夜具の廻りに座っていました。

家の内には、母の唱えるお題日のみが音吐朗々として響いていたばかりでした。

11

ところが死後十時間目、ありうべからざる奇蹟が起つたのです。そうです、奇蹟です。これを奇蹟といわばして、何といえましよう。しかもこの奇蹟は、六つの私の上に、いつも無邪気な現象として起つたのでした。

死後、すっかり硬直していた私の体は夜具の中で、何時の間にか、もと通り、やわらかくなっていました。

そして何時もの朝、目がさめるようにぱっちり目を開きました。私の周囲には父方や母方の人々が、一杯より集つてゐるのが見えました。なつかしい人たちばかりでした。

「何故、集つてゐるのだろう? 何かあつたのかしら?...」

私は不審に思いました。そして、それらの人々を、しげしげと眺めながら尋ねました。

「おじちゃん、おばちゃん、何してんの、きれいな着物を着て?...」

葬儀の喪服を、そうとは知らずに、ただきれいな着物と思ったからです。私はこの時の自分の言葉を、今でも覚えていきます。

然しく、これを聞いた人々は、飛びあがらんばかりに仰天しました。無理もありません。十時間もの間、死んでいたのですから。

「おい、ものを言つたぞッ!!」

「人が絶叫しました。

「エツ、ものを言つた?」

おゝむかえしに聞き返す言葉は、さながら幽鬼におそわれたように、おのゝいていました。

背筋に冷水をあびせられた思いは、皆一様であったことでしょうが、中には腰もぬかさんばかり、ガタガタあるえながら、逃げ出した女人の人もいました。父が、掛蒲団をねとぼすように、めくりました。そして私の体中、いたると

ころをまるで叩くように荒々しくなりながら、私の蘇生を確めました。驚いたのは、意識不明のまゝ、死んでいたはずの私の方でした。

みんなの驚愕は、驚嘆と感動に変わりました。家中は、死の悲しみより、生の喜びに沸きかえる坩堝と化しました。

一人が、医者に知らせるべく、駆けて行きました。父が、踊りあがるように喜びながら、

「おい、生き返つたぞッ!!」

と母に知らせました。

この時、母は、唱題もやめずに、たゞ静かにうなずくだけでした。母は、私が蘇生することを、よほど強く確信しているのでしょうか。或は既に、そういうこ

とを仏天より知らされていたのでしようか。それとも生死流转の次元を超越したもっと崇高な世界へ入っていたのでしょうか。たゞうなずいただけの母は、なお端然として唱題をつづけていました。

母の両眼には、真珠のような涙があふれました。涙をぬらしました。それは感謝に輝く涙でした。

もはや宗旨の如何は、問題ではありませんでした。今しがたお題目をのこしつた父方の人々も、母方の人々も、そして隣近所の人々までも、母の後に坐って合掌しました。仏壇の灯明が、一段と明るく輝いたようでした。

血をふくような涙の懊悔、母のことの祈りが仏天に通じ、常識では、どうしても考えることの出来ない、この有りうべからざる奇蹟、死後十時間もたつた人間が硬直した死體から生身のまゝで蘇生するということが起つたのです。

生き返った私には、病気になつた時の感冒も微熱もなく、何の病氣もありませんでした。

翌日は十月二十五日、町の秋祭りでした。私は孝子姉さんの背中におんぶされて、お祭りの見物に行きました。

帰る時は、もう普通の子供でした。孝子姉さんと手をつなぎ、片手におみやげをぶらさげ、ビンビンはねるよう歩きながら、秋空高く、精一杯の声をはりあ

あげて、童謡を歌っていました。

こうした元気な私の姿をみると、近所

の人々でさえも、

「昨日、死んでいた者が、もう今日は、

あんなに元気になっている。生き返った

といふことも、不思議の中の不思議だが、

第一、死んでいたなんて考えられない。

まるで獨りでもつまゝれたようだ」

と語りあつていました。

昭和三十八年の八月、大学の夏休みに帰省した時、たまたま鈴木医院の先生が私の家に来ていきました。この先生は、私が六の年、死んだ時と、生きあがった時に、立ちあつてくれた医者でした。母が私を紹介すると、医者は目をみはりながら、

「この子だったのか、一度死んだのは……随分大きくなつたなあ」と、なつかしげに、ほゝえんだことでした。

日蓮聖人の教えの中に、

「理証・文証よりも現証」

という言葉があります。これは確かに理論・理屈よりも実行が大切であることを教えられたものですが、然し同時に、理論・科学では割り切れない宗教的現象いわゆる神秘・奇蹟の実在することも意味しているものと解釈出来るのではないか。どうか。

文永元年八月……それは弘長三年二月二十三日、伊豆流罪が赦免された翌年、十一月十一日の小松法難の起る三ヶ月前

のことでした。

日蓮聖人は久しぶりに故郷房州へ帰り
お母さんの安否をたずねました。お父さ
んは既に正嘉二年一月二十四日、逝去さ
れていきました。

家の門に立った時、家の内は、たゞな
らぬ気配に騒いでいました。お母さんが
今しがた、こと切れたばかりだったので
す。

日蓮聖人はお母さんの枕もとで、一心
に祈念をこらしました。奇蹟は起りまし
た。お母さんは蘇生しました。そして文
永四年八月十五日逝去されるまで、四ヶ
年間、生ながらえていました。

この事実を日蓮聖人は、身延入山後の
建治二年十一月、著述された「可延定業

」の中に、

四四

「日蓮、悲母を祈りて候いしは、現身に
病いをいやすのみならず、四ヶ年の寿命
を延べたり」

と懷述しています。

今、私自身の蘇生を述べるに当つて、
日蓮聖人の事蹟を引きあいに出することは
誠におそれ多いきわみですが、奇蹟を否
定する人々に対して私は、日蓮聖人の事
蹟と私自身の体験をもつてしても、
「奇蹟は必ず起る」

ということを強調したいと思います。
なお「可延定業抄」の冒頭には、次の
名文が掲げられています。

「それ病いに一あり。一に軽病、二に重
病。重病すら、善き医にあいて、急に対

治すれば、命なお存す。いかに況んや軽病をや。

薬に一あり。一には定薬、二には不定薬。定薬すら能く感悔すれば、必ず消滅す。いかに況んや不定薬をや。」

13

私のことがあって以来、母はますます強盛に信仰を勵みました。昭和二十五年、それは身延山篤信徒の信行が創設される前年でした。

母は身延山における二十一日間の參籠修行を発願し、自炊用の米一升をたずさえて身延山に参拝しました。

二十一日間、米一升、それは日割りにすれば、一日五勺にもみたない乏しい食

糧でした。母は断食をも辞さないほどの決意でした。

宿を西谷の林蔵坊にとり、朝、本山の勤経に参拝して以来、昼間は祖師堂で、夜は祖廟、旧草庵前の砂利の上に端座して、夜のふけるまで、座りすめに座つて、唱題修行をつゞけました。

毎日二十時間近くも座りつけた唱題修行は、文字通り、骨の折れる修行の連續でした。膝頭はぬけ、腰の骨は、へれ折れるばかりでした。

母は、入信以来、一度も信仰の指導者についたことはありませんでした。それだけにお經の一匁も満足に読めない母でした。ひたすら但信口唱の唱題一筋の道、これで推し通して来たのが、これま

での母の折りであり、修行だったのです。

然し、この参籠修行が、身延山と結ばれるきっかけとなりました。翌年より身

延山篤信徒の修行が始まるや、母は続いて四回も入行しました。

信徒も次第にふえて来ました。また身延山大学々頭である松木本興先生が、毎月のように布教に来られるようになります。

身延会刈谷支部の名を拝命してより、御会式ともなれば、身延山の学生が大勢応援に来るようにもなりました。

信徒はますますふえる一方でした。会社の社宅では、さすがに家も手狭くなつて來ました。そこで父の退職金と、母が修行始めて以来たくわえていた淨財とを

もって、新しく道場を建てることになりました。

昭和二十七年、この年は辰年でした。その辰の日、見事、道場が落慶しました。奇しくも母も辰年の生れでした。これが今のが刈谷身延会道場となつているのです。

14

「我が出家の動機」を語るに当つて、以上、長々と前置きばかりを述べて来ましたが、然し、この前置きなしでは、私の出家の動機は語られなかつたからです。前置きは、昭和六年、父が訛の判らぬ病気になつたことから始まりました。昭和十一年、旅僧の來訪、母の入信、父の奇蹟的回復、同年五月これにつづく豈

兄さんの菩薩童子のような臨終の模様、昭和二十三年十月、私が十時間もの仮死

状態から救われた奇蹟的歎生昭和二十五年、母の身延参籠修行につづく昭和二十七年の刈谷身延会道場の建立、そしてこれら数々の出来事を通して今日まで二十数年もの間、終始ひたむきに貰めいて来を母の不屈の信仰…………こうした話しを聞かされたのは、昭和三十年の春、私が中学一年に入学して間もない頃のことでした。

「お前も、もう中学生になつたのだから何時かは伝えておかねばならないと思つていたことも、聞きわけられるだろ？」あらためたように私を呼びつけた母は、諄々と語り始めました。母の言葉は

静かでした。私は、うなだれて聞き入っていました。

話しが畢竟元さんの臨終に及んだ時、あふれる涙にむせんだ母の言葉は、幾度も途切れました。

心ゆすぶられる深い感動の中、話しが私自身の、六つの時の出来事に及ぶや、「おじちゃん、おばちゃん、何してんのかきれいな着物を着て……」

と言つたことのある、かすかな記憶がはつきりと、よみ返つて来ました。

「そうか、そうだったのか。あの時、俺は死んでいたのか……十時間も！」その時の母の懊惱の祈りの、厳しさ、尊さもさることながら、今こうして生きている自分の命が、実は六つの年、既に

死んでしまってはいたのだ、という事実を知らされた衝撃は、あまりにも強烈でした。

訳も判らず涙は滝の如くあふれ、歯はガチガチとなり、全身ブルブルふるえ出すのを、どうすることも出来ませんでした。

その後、学校へ行つても、家に居る時でも、

△思ひまじい！

と思っても思われるのは、六つの時の出来事でした。私にとっては、もはや過去の語草として、かたずけられない問題でした。

△あの時、あのまま死んでいたら、

俺は一体、どうなつただろう

△俺の魂は、一体どこへ行つたのだろう。
△それとも、魂なんて、ないものだろう
△…若しくなければ、死んでしまった
俺という人間は、一体どうなつてしまつたのだろう。霊散霧消、たゞそれだけのことなのだろうか？
それは恐しい疑惑でした。他人のことではなく、自分自身のことだけに、黒い疑惑は、脳裏にこびりついて、離れることはありませんでした。
△それにしても、事実、俺は、あの時生き返つた。何故、生き返つたのか、何のために…?
△そして、今も、こうして生きている。
△何のために生きているのだろう
過去を想い、未来を想い、蘇生の奇蹟

を喜ぶよりも、人間この不可解なる生と死の大問題を、考え込む日が多くなって行きました。

然し、中学一年生の身に、これが解決されようはずもありませんでした。

15

中学二年生の頃、こうした疑問を考えること自体に、つかれ果てゝいた私の脳裏に、ふと、ひらめくものがありました。それは、
△自分が生きているのではない。お題目
△が生きているのだ
△自分は、お題目によつて生かされてい
る人間だったのだ

それまで私は、自分自身の奇蹟的な蘇生の事実についてさえも、自己本位に自己の立場で考へては、悩んでいたのです。

死の深淵より、奇蹟的に生き返ったといり、その結果は同じであつても、それを自己中心に自己の立場で見る見方と、法華經中心に法華經の立場で見る見方とでは、何と大きなへだたりのあることでしょう。それは、まさしく天地震泥の差、といつても過言ではないかも知れません。六つの時の死、それは確かに、自己中心的な人間の、流転する業の中の死であつたのです。

そして死からの脱出は、あの母の懺悔によつて、死を転機に、自己本位な立場

から、法華經中心の世界に攝取され、法華經によって、法華經の中に蘇生せしめられたものであったのです。

人間生死の一大事、この重大問題を解決する真実なるもの——それは、自分の側にあるのではなく、実は法華經の側にあったのです。

悩みに悩み抜いた靈魂問題にしても、人間としては、遂に仏陀の如く悟りを開かない限り、永遠に解決されないものであります。然し仏陀は、この難問題をも、既に法華經の中において解決されていました。

へ法華經に生きよう。法華經こそ、この

不可解な人間の、生存のすべてを解決する

その時、私は、そう思いました。^{五〇}そして、一度は薬に死んだ自分の命をかえりみ、生きている法華經に、現になお、生かされている自分自身の五体、この十本の指、この腕、この胸、この足をみつめた時、この時ほど自分の体を、いとおしく思つたことはありませんでした。

へこの体は、自分の体ではない。法華經によって与えられ、法華經によって生かされている体なのだ。

へ法華經こそ、自己の真実の命なのだ。へ法華經は生きている。生きている法華經に生きることこそ、真実に生きる道なのだ。

自己中心的な立場を離れて、法華經中心の立場から自分自身をみつめた時、眼

前に、大いなる世界が開かれ、自分の進むべき道をはつきり知ることが出来た思いでした。それは出家の道でした。

16

然し、この決意は誰にも口外しませんでした。当時、学校では高校受験の準備がされていました。私は普通の高校を受験するふりをしながら勉強していました。

昭和三十三年の一月、中学卒業も間近かに迫った頃、母から将来の方針を尋ねられました。その時、私は何のためらいもなく、出家の決意を打ちあり、

「身延山高校へ行きたい」

と答えました。初めて聞く私の決意に母は、「我が意を得たり」と喜ぶ一方

法華経に生きることの至難さ、競い起つて来る三障四魔のこと、そしてそれよりも、法華経の美名にかくれて自己打算の心の起つて来ること等々を、強く戒めました。

然し私は、ひるみませんでした。これ以外に私の生きる道はない、と信じていたからです。母の喜びようは、一通りではありませんでした。その夜は、一家あげて私の志を祝福してくれました。

その頃、たまたま松木本興先生より、孝子姉さんを、先生の長男である善興上人のお嫁めに…という話しが起りました。一家は一重の喜びにつゝまれました。

縁談は急速に進みました。そして、そ

の年四月、私は身延山高校へ入学し、五月には孝子姉さんが、松木先生のお寺へお参りに行きました。

この時の母の胸中は、いかばかりであったことでしょう。昭和十一年、父の病氣のさ中、通りすがりの旅宿より伝えられた一粒のお題目の種が、幾歳月の風雪にも堪えて、今や見事に、法華の花を咲かせたような思いもしたことでしょう。

身延山を巣立たんとして、弘教の血潮の、うつまつとして沸る時、今、静かに思い起さることは、中学一年生の頃、母が語ってくれた話の数々、わけても、私を出家せしめるほど強烈な印象を与えた、豊兄さんの臨終のこと、そして私自身の奇蹟的蘇生のこと……。

そうです!!

豊兄さんが、一死をもって母に示した法華經の光り、母が私に示した法華經の力、この光りと力を、人々に伝えて行かねばなりません。名古屋の人々にも、有縁無縁の多くの人々にも・・・そこに私の蘇生の意義があり、仏天に報ゆる道があるのです。

卒業後、私の赴く所は、名古屋市内の萬行寺という法城です。ここでは信徒が私を待っています。

— 第二回 —

デクノボウの祈り

〈雨ニモマケズ〉の詩の中
に宮沢賢治の無限の
祈の声が聞えて来る。



奈良学芸大学三年
榎本 遼子

宮沢賢治が亡くなつてから、はやくも二十
年の歳月が流れました。

この間、賢治の遺稿は、全集本として各出版社からも刊行されました。またその一部は、単行本ともなり、学校の教科書をはじめ、各種の雑誌や機関紙・新聞にも紹介されました。映画や舞台にも上演されました。紙芝居はもとより幻灯フィルムにも作られました。また賢治の伝記にしても、多くの人々によつて著述出版されて来ました。

昭和八年九月二十一日、岩手県花巻の農村ではかなくも病魔のため、三十八才の若さで亡くなった無名の詩人は、その崇高な詩篇の香りと共に、今や日本全国、大人にも子供にも、その名を知らない者はない、といわれるほど有名なものとなりました。

ところで、賢治の代表作としてうたわれた「雨ニモマケズ」という詩篇が、人々に知られ親しまれたのは、その冒頭の書き出しから、

「サウイフモノニ ワタシハナリタイ」

というところまででした。その行数は三十行でした。大抵の人々は、この三十行が「雨ニモマケズ」という詩篇の全部である、と思い込んでいました。ところが実は、そうではなかつたのです。

前にも述べましたように、賢治が亡くなつた直後、賢治がやすんでいた蒲団の下から、ポケット用の一冊の手帳が発見されました。今日、その手帳を「最後の手帳」と呼んでいますが、「雨ニモマケズ」という三十行の詩篇は、この「最後

の手帳」の第五十頁から第五十八頁まで九頁の間に書かれていたものでした。そして次の第五十九頁には、何と、

南無邊行菩薩

南無上行菩薩

南無多宝如来

南無妙法蓮華經
南無釈迦牟尼佛

南無安立行菩薩

という大マンダラ本尊が、したゝめられてあつたのです。それは昭和六年十一月三日の日付けでした。

これまで、賢治の詩を紹介して来た多くの人たちでさえも、ごく少数の人を除けば、殆どといつてよいほど、この大マン

ダラ本尊が、「雨ニモマケズ」という三十行の詩篇に、そのまま密接に、つながつたものであった、という重大な事実には気付かせんでした。

そして、それとこれとは、原本（最後の手帳）の上では、たとえ頁はつゞいてはいても、全く無関係なもの、とばかり思ひ込まれていたのです。

また賢治の伝記を研究した人々の中には、賢治が熱烈な法華經の信奉者でありその生涯を賭してまで法華經文学の創設を志していた、ということは知つてはいても、文学と宗教は、全く異った次元のものである。といったような考え方のものに、それとこれを別々のものとして、切り離してしまつた人もいました。

また両者が内容的につながつたものである、とは知つてはいても、大マンダラといふ一宗一派的のものを、普遍的な文學の詩の中に持ち込むことによって、却って詩の価値が削減されるかも知れない、といったような危懼のあまり、しいてこのことを発表しなかつた人もいました。こうして大マンダラ本尊のことについては、ごく一部の人々にしか知られないまゝ、「雨ニモマケズ」の詩篇は、たゞ三十行だけのものとして、今まで巷間に普及されて來たのでした。

然し、この大マンダラ本尊こそ、賢治がその生涯、日夜に捧げた真摯な祈りの対境であり、また同時に、詩篇三十行にわたって、うたいあげた理想像に対しても

「サウイフモノニ ワタシヘナリタイ」と祈らずにはおられなかつたものであつたのです。否むしろ、この大マンダラ本尊に対する信仰からこそ、全篇にあふれる、あの崇高な賢治の詩情が、にじみ出て來たものであつたのでした。

賢治は申しました。

「南無妙法蓮華經は、私共のほんとうの名前です」

これは賢治みずから、すべての人々と共に、お題目を唱えることによって、仏陀と等しき人格を形成することは、たとえ永劫の未来であつたとしても、少くとも今生においては、与えられた環境の中でひたすら法華經を実践する人間でありたい、そして法華經の四次元の世界一

あの光明燐然たる大マンダラ法界に攝取されて一味同体となり、信ずるお題目の心を我が心とし、仰ぐお題目の光りを我が光りとし、唱えるお題目の名前も我が名前とする、そういう人間本来の姿、この真実なる人間の姿が、開顯されんことを願つたものであつたのです。

「最後の手帳」の第五十九頁に、したゝめられていた大マンダラ本尊の中には、久遠の本仏釈尊のお弟子として脇侍する四人の菩薩が勅請されていました。それは上行菩薩と無辺行菩薩、淨行菩薩と安立行菩薩の四人でした。

この四菩薩は、その名のすべてに、悉く「行」の一宇が付いているように、法華經を行ずる無量無辺の人々の代表者で

した。

賢治は、法華經をたゞえながら、この四菩薩のあとにつづいて行こうとする自己をかえりみて、その実践の在り方を、自身のおかれた日常の環境の中に見出そうと願っていました。

そして、そう願えば願うほど、「雨ニモマケズ」という詩の中においても、東ニ病氣ノコドモアレバ

行ツテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アレバ

行ツテソノ稻ノ東ヲ負ヒ

南ニ死ニサウナ人アレバ

行ツテコハガラナクテモイイトイヒ

北ニケンタワヤソシヨウガアレバ
ツマラナイカラヤメロトイヒ

と、うたわすにはおられなかつたのです。東西南北の四方の四は、そのまゝ上行・無辺行・淨行・安立行の四菩薩の四につらなるものであつたでしよう。また、東西南北へ「行ツテ」という行は、四菩薩のそれぞれの名前の行を連想するものであつたでしよう。賢治は、自己実践の在り方を、そのようだうたいあげるほど、四菩薩の芳触を慕つていたのです。

通常ならば、遠くの家で病人が出て困つてゐるという話を聞いても、わざわざ行って看病してやることはありません。また遠くの方で、疲れ切つた老婆の姿を見かけることがあつたとしても、わざわざ行って、代りに稻の束を背負つてやるということはありません。

りました。

また農学校の教師をしていた時でも、訪ねて来る学生があれば、心ゆくまで語っていました。

或は何処かの家で、死にそうな人がいると聞いても、わざわざ行って、安心立命を与えてやるということはありません。また或は、何処かで喧嘩や訴訟といったような争いごとが起つたと聞いても、わざわざ行って、仲裁や調停に入ることもあります。

然し賢治は、わざわざ行ってとも、何とか役に立ちたい、と願わずにはおられなかつたのです。

事実、賢治は、東北碎石工場の技師をしていた頃のこと、米をつくのに、百害もある房州石の代りに、石灰岩を使用するよう、頼まれもしないのに、盛岡市内の何十軒という米屋を、嫌な顔をされながらも、一軒一軒説いて歩いたこともあります。

アラユルコトヲ

ジブンラカンジョウニ入レズニ
ヨク見聞キシ、分カリ

ソシテ忘レズ

そういう賢治であったのです。ひたすらに法華経の菩薩行を、身をもって実践して行こう、と努力して来た賢治でした。

然し、それにしても、あまりにも体が病弱でした。単身、上京するたびに病に倒れ、心ならずも実家につれもどされては、父母の看護をうけねばなりませんでしょ。亡くなる二日前、今は絶筆となつた句に、

病のゆゑにもくちなんいのちなら

み法に棄てばうれしからまし

と覚悟を示したほどの賢治ではあって

も、その二年前には、同じ病床にありな

がら、

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

欲ハナク

決シテ瞑ラズ

イツモシヅカニワラツテキル

そういう、何ものにも何ごとも屈しない頑健な体、何時も心静かにしておられる健康を、病身であつたゞけに、切々として願つていたのでした。

また何時になつても、親の厄介になつていなければならないことを申し訳なく思えばこそ、

野原ノ松ノ林ノ蔭ノ

小サナ萱ブキノ小屋ニキテ

一日玄米四合ト

味噌ト少シノ野菜ヲタベ

といったような、たとえ衣食住は最低ではあっても、これに安んじながら、独立した生活の出来ることを願わざにはお

られなかつたのです。

それは、禪僧のような古淡な生活風情を描写したものではなく、病床にふす賢治の、ギリギリの願いをあらわしたものでした。

東北の農村は、しばしば旱魃にみまわれることがありました。また真夏といふのに、北海の寒波におそわれるという、東北地方特有の冷害も再三のことではあります。農作物は殆ど全滅に瀕しました。すべての農民は飢餓・窮乏のドン底にあえぎ、都会へ売られて行く子供は、あとを断ちませんでした。

ヒデリノトキバナミダラナガシ
サムサノナツワオロオロアルキ

農民の上を思う賢治は、無限嘆哭の中

たゞオロオロするばかりでした。それは大火所焼、三界火宅の婆娑世界における民衆を、教わんとして教うことも出来ず、たゞ仏天に懺悔慟哭する賢治の、阿修羅のような姿でもあつたのです。

自分を勘定に入れずに苦しむ民衆の中にあって、たゞひたすら民衆の苦しみを除かんと願つて來た賢治が、若し普通の健康体であつたならば、文字通り、東西南北、いすれの処へも、わざわざ出かけて行つては、思う存分、菩薩行としての奉仕をすることも出来たことでしょう。そして、その実践の中に、少くともみずから之心に慰さめられるものも見出され行つたことでしょう。

然し、非常の災害に遭遇した時でもな

い泰平な平時においても、なお賢治が、

三界は安きことなし

なお火宅の如し

衆苦充滿して甚だ怖畏すべし

常に生老病死の憂患あり

かくの如き等の火

熾然としてやます

という法華經の經文に照して、災害の時と同じ心で、見も知らぬ人々に対してさえも、無報酬の奉仕をつゝければつゝけるほど、おそらく世間の人々は、賢治の信仰を理解出来ないまゝ一層輕侮冷笑して行つたかも知れません。

たしかにそれは、ありうることでした。

ありうることであつたればこそ賢治は、

如何なる批難嘲笑の中にあつても、甘し

てこれをうけつゝ、なおひたすら真実を追求し、真実を実践して行く人間でありたい、と願うばかりでした。

ミンナニデクノバウトヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ

それは胸もしめつけられ、はらわたもしほられるような賢治の折りでした。

然し、この「デクノボウの折り」こそ法華經二十八品の經典の中に、燐然として輝く「常不輕菩薩の折り」であつたのです。

(紙数の都合上、完結は次号へ)

靈鷲山の仏蹟と多宝山

荒廃した仏蹟の中に釈尊在
世の當時を偲ぶ

日高白象

靈鷲山とは、インドではギジャクツタと呼ばれ、漢訳經典の中では耆闍崛山とも音訳されています。法華經序品第一の冒頭に

如是我聞一時仏住王舍城耆闍崛山中

かくの如きを我れ聞き、一時、仏王舍城、山の中に住したまゝとあるのがそれです。また靈鷲山・靈頭山・鷲頭山・鷲台山・鷲峰・靈巒・靈山等と意訳され、法華經序品の自我偈の中では、

一心欲見仏 不自惜身命 時我及衆僧俱出靈鷲山
一心に仏を見たてまつらんと欲して自ら身命
を惜ます。時に我れ及び衆僧、ともに靈鷲山

六二

神通力如是 於阿僧祇劫 常在靈鷲山及余諸住處

神通力かくの如し、阿僧祇劫に於いて、常に靈鷲山、及び余のもろもろの住処にあり。

と示されており、我が國では「鷲のみ山」とも訓訳されています。

「では何故、この山に鷲という字がついているのか……。」

といふことについては、龍樹の大智度論第三に、

「鷲を鷲と名づけ、崛を頭と名づく。この山頂は鷲に似たり、王舎城の人、その鷲に似たるを見て、共に伝えて鷲頭山という。

また次に、王舎城の南、屍陀林の中に、もうもろの死人多し。諸鷲、常に来つてこれをくらべ、かえつて山頭に在り。時

に人、遂に鷲頭山と名づく

といふ、また靈鷲と訳するについては、玄応音義第六に、

「この鳥、靈ありて人の死活を知る。人死せんと欲する時、則ち群りて彼の家に翔り、その林（死屍をする屍陀林）にて食す。能く懸に知るを以つての故に、靈鷲と号す。」

といふ、次に靈鷲、靈台と訳するについては、大唐西域記第九に、

「宮城（旧王舎城）より東北に行くこと十四。五里（我が國では三里半）にして燒陀羅矩吒山（耆那矩吒山）に至る。北山（多寶山）の陽に接して孤標独起す。既に鷲島を構成しめ（鷲峰）、また高台

に類す（鷲台）。空翠相映じ、濃淡色を
分つ」

といわれています。

この鷲は、羽翼やく黒く、頭部は灰白色で、毛は少く、好んで死屍を食し、インドの到る所に棲息しているものです。

今でも靈鷲山の一帯には、この鷲が多く、翼をひろげれば二メートルあまりもある大鷲が、山の上空を雄々として舞つてゐるのが見かりられます。

然し、死屍とみれば、牛馬をとわず、たちまちの中に食いあらしてしまう、この鷲も、生きた人間におそいかかるといふことはありません。

靈鷲山の三峰と多宝山

六四

靈鷲山は、地表およそ三〇〇メートルの多宝山の山頂から、東南の方へ、なだらかに流れている山腹に、あたかも富士山の中腹の、宝永山のようそびえていた山でした。

靈鷲山には、三つの峰があります。その第一峰は地表およそ一八〇メートル第三峰は地表およそ二五〇メートル、二峰は、王舎城から東門へつなぐ道路をへだて、高起山の麓に接していました。また第一峰は、第一峰と第三峰の中間に位する瘤のよくな丘陵でした。

そして靈鷲山も多宝山も、王舎城をめぐる五大山の山肌が、すべてそつであるようだ。麓から四・五合目あたりまでは灌木がまばらにはえてはいても、それか

ら上、山頂に至るまでは、あたり一面、一本の草木もない岩だらりの山肌を呈していました。既に鷲鷹山第一峰へ登る参道の途中から、山肌は岩だけになつていたのです。

申すまでもなくお釈迦さまが、法華経を説かれたのは、この第一峰の山頂でした。こゝでは法華経のほかに大品般若經、金光明最勝王經、或は無量壽經、等々の經典も説かれているのです。

前にも述べましたように、この山頂には、わずかながら平らかな場所があり、その中央には、今なお残る如来香室といえ、お釈迦さま説法の宝座がありました。また、この宝座より南の方、やや下った所には、千数百人の大衆を収容するこ

とも出来る広場がありました。

お釈迦さまは、この宝座より南面して広場に噴泉する多くの仏弟子や信徒のために、無量の大法を説かれました。人々は山腹のお釈迦さまを仰ぎながら、説法を聞き入つていました。お釈迦さまの背後には、多宝山の威容が、そびえていました。

法華經二十八品の經典の中には、見宝塔品第十一の冒頭に、高さ五百由旬、縱広一百五十由旬という巨大な多宝仏塔があり、金・銀・瑠璃・碑礎・碼礎・真珠・玫瑰の七寶をちりばめながら、大地より空中に湧出した、といふことが説かれていますが、現に多宝山の山名と位置・威容からしても、そういう莊嚴な情景を描き出

すのに、あえて至難なことではなかつた
ことでした。

靈鷲山の仏蹟

大唐西域記によれば、玄奘三蔵が靈鷲山をおとされた時、その頃なお、提婆達がお釈迦さまを殺害しようとして投下したと伝えられる大石、それはお釈迦さまが説法をされるため、第一峰の下の巻道まで登つて来られた時、先き廻わりしていた提婆達多が、山頂より落下げしめた大石であります。

その他、お釈迦さまや舍利弟・目連、迦葉等々の仏弟子たちが禅定三昧に入つておられたという石窟。阿難尊者が魔王のために惱乱せしめられたという場所、

或は法華經説法の記念卒堵波、等々そういうものがあつたといわれています。

また同記には、

「如來世を御する五十年に垂んとし、
多く此の山に居り、広く妙法を説く。ビ
ンビサラ王、聞法のための故に、人徒を
輿発し、山麓より峯峯に至り、谷に跨り
巖を凌ぎ、石を編して階となす。

広さ（幅）十余歩、長さ五・六里（我
が国では一里強）、中路に二の小卒堵波
あり。一を下乗といふ、即ち王、ここに
至りて徒行して以て進む。一を退凡とい
う、即ち凡夫を簡んで同往せしめず。

その山頂は、則ち東西長く、南北狭し。
崖の西崖に臨んで、精舎あり。高広にし
て奇麗、東にその戸を開く。如來在昔

多く居て説法し給えり、今 説法の像を作ら 量 如来の身に等し」

と、当時の山状をしるしています。

折込ハガキについて

然し、その後、インドにおける仏教滅滅のため、王舎城と共に靈鷲山の仏像は、悉く走て破壊されるまゝ、千数百年來

卷之三

☆本誌発展のため毎号皆様の読後の
御感想・御意見・御希望をお待ちし
ています。

異教徒に破壊されるまゝ、千數百年來、
風雨にさらされ、今日わずかに、山頂に
おける如来香室の礎石と、籠より山頂に
至るピンピザーラ大王の布石階段参道の
跡、ならびにその沿道二基の下乗、退凡
の塔趾のみが、当時の面影を留めるはか
りでした。

☆まだ説代を払込んでおられない方は、必ず住所・氏名・購読期間・号数を明記の上、早目に振替用紙でお申込み下さい。

(以下次号)

青年よ街頭に擊鼓宣令せよ



宗門の融和・団結の道を求めて

解説

日高白象

六八
これは新年号に「創価学会の動向と日蓮宗青年運動の在り方」と題した質問に対する第三回目の解答です。

これまでに本誌では、前後二回にわたって、「創価学会の動向・今後の学会は、どうなるか」ということについて、日頃、思っていたこと、考えていたこと、そして予想されること等を述べて来ました。今、それを要約すれば、

- (一) 三百万所帯にふくれあがつた創価学会は、昭和三十八年度の教學武装を通して、教學面においても、信行面においても、或は行動面においても、全面的に大きく幅をひろげながら、みずから「愛される学会」となるべく変貌をとげようとしている

(二) 然し、その変貌は、あくまでも目的的ための手段であって、たとえ如何に手段は變つても、学会の目的とする、いわゆる国家全体、ひいては世界全体まで、学会一色にぬりつぶし、他の一切の宗教を否定しつつ、学会の本拠たる富士大石寺にて、学会の國立戒壇を建立しようと王仏冥合の國立戒壇を建立しようとする野望そのものには、何ら變るところはない。

「力が、三百万所帯の中の、百万になんなんとする青年行動隊であるだけに、その動向は今後一層、油断なく監視しておかねばならない。」

といつたようなことでした。

そこで今回よりは、そうした学会の動向を急頭におきながら、

「では日蓮宗の青年運動は、如何にあるべきであろうか。その本来の姿は・・そして時代に對処する在り方は・・・」
といつたようなこと等について、少しばかり考えてみたい、と思ひます。

F

よく聞かされることですが、講習会や座談会を開けば、そのつどのよう、
(三) 学会が今後一層、手を変え、品を
変えて、政治的進出を増強して行くことは必至である。しかもその原動

て、統一的な布教をしなければならない。このまゝで行けば、新興宗教に押されるばかりだ。

日蓮宗には全国に六千ヶ寺の寺院がある。若しく、六千ヶ寺の寺院と、その檀信徒が打って一丸となつて立ちあがるならば、創価学会なんぞは、問題するにも足らないはずだ。何故、日蓮宗は团结しないのか。宗門の要人は、一体、何をしているのか？」

といつたような悲憤慷慨の声が、熱心な信徒の中から起ることです。

それは新興宗教、特に創価学会が、統一した教学、統一した目的をもつて、全國的に統一した布教戦線をはり、戦後の短期間の中に、恐るべき組織的勢力を拡

張するに至った事実を見るにつけても、日蓮宗の現状を憂うるあまり、ほとばしる言葉でありましょう。

たしかに日蓮宗は、六千ヶ寺もの寺院を擁しながら、縦の線といふ横の線といい、新興宗教のように一直線に統一されてしまひません。従つて悲憤慷慨されるように、組織的布教についても、見るべきものすらない、とも申されましよう。そして寺院は寺院ごとに、各個ばらばらの感を呈しているようにも思わしめられるのが現状です。

然し、これは日蓮宗寺院の一ヶ寺一ヶ寺が、興学、布教の両面にわたつて、根強い独自の見識をもつてゐる、といふことを物語るものではないでしょうか。

ひるがえって新興宗教をみれば、たしかに彼等は、縱にも横にも統一した布教体制を確立して、圧倒するような組織力さを持っているように見えますが、然しそれは、たゞ浅薄な表面上の、画一的なものにすぎないのです。

いずれの新興宗教にしても、その教団全体が、興学・布教の内容に関して浅薄であり、宗教的見識にも社会的良識にも欠けた点が多く、従って本部よりの指示指導に対して無批判的であり、盲目的であればこそ、そうした強力を統一・組織も可能とされるのです。

従つて彼等の組織は、外形的・画一的なものにすぎず、ひとたび事が起れば、一朝にして分裂・崩壊してしまう危機を

内蔵している、とも申されましょう。

事実、いずれの新興宗教にしても、如何なる外部からの批判よりも、むしろ内部から起るであろう分裂・崩壊の危機に、常におのゝいています。たとえば、これまで強力な組織を維持して来た教祖や会長が死ぬという事態が起つた時、そして代が替るという事態に迫られた時に起る動搖が、則ちそれです。それは組織が強力であればあるほど、その危機も深刻であるはずです。そして危機を案すれば案するほど、中央集権的組織を強化して來ているのです。

ところが日基督教にあつては、こうした不安は全くありません。宗務院の内局がいくら代つても、びくともしないのです。

こゝに日蓮宗全体が、各個に根深い独自見識をもつてゐるといふことが出来ま

しょう。それは強力な全体的組織が稀薄であるから、とじうことゝは別問題です。

語るにも落ちる宗団となってしまつてゐることでしよう。

G

「では各寺の独自性を活かしながら、宗門全体が強力な組織活動を生み出すには、一体どうすればよいのか。そういう名案がどこにあるのか」

という問題が、こゝに起きて来ます。今この問題を解決するに当つては、まず何よりも文證を法華經の經典の中に求めねばなりません。法華經の中にこそ、必ずや、かかる重大問題は、嚴然として解決されてゐるはずのものです。

それは、いわく「但行礼拝」であり、いわく「但行禮拝」ではなかつたでしょ中分解してしまつて、新興宗教にも劣る

うか。

日蓮大聖人の上行菩薩道は、そのまゝ法華經第二十に示された常不輕菩薩道でした。常不輕菩薩の街頭における「但行礼拝」、これに加うるに「擊鼓宣令」をもつてする集団的菩薩行、この一行こそ今日の大問題を解決するものあり、日蓮宗にして始めてなし得る宗門独特のものではないでしょうか。

理論・理屈は兎も角として、都市においても地方においても、日蓮宗の者であるならば僧俗をとわず、老弱・男女・貧富・貴賤・そして賢き者も、愚かな者もすべての者が参加して出来る立正安國の祈り、

信する者にも、謗る者にも、有縁無縁

の一切の精靈にも捧げることの出来る平等の祈り、

たとえ「チンドンヤ」と嘲われても、嘲う人にこそ捧げる常不輕菩薩の祈り、教義を配布し、或は街頭に立って、能弁の者は能弁なまゝに、訥弁の者は訥弁のまゝに、小学生は小学生らしく、誠意を吐露して「人間礼拝」を説く時、その真心こそが、お題目の祈りと共に、一般世間の人々の心田に仏種をうえ、或はこれをめばえしめて行くのではないですか。

宗門全体を打って一丸とした融和・團結、それは殊さらな智恵才覚にもよらず、こうした実践的祈りによって、おのず

から与えられるでありますよう。

若し、全国六千ヶ寺の寺院と檀信徒が街頭報鼓宣令に立ちあがつたならば、その力こそ、まさしく日本全土を圧し、國土成仏の事相を秀髪とせしめることでしょある理論理屈は、それからのことです。それにしてもかかる行動の推進力となるものは何といつても宗門青年僧侶と在家青年信徒の決起にまたねばなりません。

せめて本誌を発行している身延山大学高校の駒峰会学生僧が、身延卒業後、全国各地に帰省分散しても、ひとたび街頭布教の起らんとするや墨染の衣に木撻の袈裟、手甲脚絆に網代笠ウチワ太鼓をもつて全国より一堂に集結する者、乃至三十人、五十人となり、これが全国各地に

隨時隨所に於いて行われるようになるなればそれだけでも宗門布教に寄与するところ少なからざるものがありますよう。

全国六千ヶ寺の寺院僧侶は、等しく街頭布教の服装を整えねばなりません。檀信徒も等しくウチワ太鼓を備えねばなりません。そして地区ごとに各寺院檀信徒が打って一丸となつて街頭に進出することです。

宗門の清規には、「給仕第一、信行第二、學問第三」と示されています。日蓮大聖人が鎌倉街頭、杖木瓦石の迫害の中に獅子吼された往時を偲んで、みづから街頭に擊鼓宣令すること、給仕第一の実践ではないでしょうか。

「日蓮が一門は獅子の吼ゆるなり」

第5次身延山布教別動隊

九州街頭布教紀行



これは本年々頭、冬休みを返上した身延山山布教別動隊28名が、1月4日より10日まで連日福岡・熊本の両県下19都市に於て現地寺院・信徒と共に華々しく展開した九州地方未曾有の布教記録である。

編 集 部

本年々頭、新春を飾る九州街頭布教は身延山より派遣された布教別動隊を迎え福岡県・熊本県の両宗務所主催のもと、現地寺院・檀信徒・青年会・伝道隊の総力を結集し、一月四日より十日までの一周間・門司・小倉・八幡・戸畠・若松・折尾・直方・飯塚・福岡・甘木・吉井・久留米・八女・筑後・大川・柳川・灘高・大牟田・熊本の十九都市において華々しく展開された。

布教は街頭のみならず、各地に平和祈願講演会・座談会、更には青年行学講習会も開催され、布教日程終了後も一月十三日の宗祖初御縁日には、福岡県宗務所において北九州寺院・寺庭婦人会、

青年会、檀信徒の有志による合同研修会がもようされ、期せずして九州地方では、未曾有の街頭布教を主流とする盛大な布教週間がくりひろげられるに至った。

昭和三十五年の正月より始まつた身延

山街頭布教は、既に今日、日蓮宗門はいうまでもなく他宗他派においても、新興宗教の間においても、驚異的布教として注目されるに至っている。

然し、それにもかゝわらず行動半径に制限があり、遠隔の地方へ出勤するには幾多の困難があった。

そこで奮起したのが身延山鷲峰会を主体とする学生有志の布教別動隊である。別動隊は昭和三十七年夏休み以来、休暇ごとに休暇を返上し、旅費も各自に自弁

して、身延山より東京へ、或は信州一円に、或は関西一円に布教を展開して来た。

今度の九州布教は通算五回目である。

五回目の九州布教、それは本誌正月号

に、

「出家の動機、我れ仏子と生れて」

といふ記事を書いた鷲峰会員小寺崇元君（身延山大学三年）が、故郷が熊本であるところから、既に昨年の夏休み、九州帰郷の折から発願、準備していたものである。

小寺君の半年に余る悲願は、かなえられた。現地が総力をあげて受け立つたのである。鷲峰会も奮起した。そして全力を傾注して準備をすすめた。身延山布教部も支援を惜しまなかつた。学生の自

發的熱誠にこたえて、教箋数万枚と十万円の補助金が支給された。それは街頭布教生みの難、岩間布教部長の特別の計らいであった。

思うに、現地における布教時間は、最大限に活用しなければならない。それに初日（正月四日）九州の関頭、門司における布教第一声は、午前八時、乃至八時三十分頃でなければならない。

それに間にあう列車は特急へさくらⅤであつた。然し、その特急券を、しかも二十数枚、まとめて入手することは困難をきわめた。

年末・年始の東京駅窓口には、一枚の特急券を求めるため、一昼夜も立ちならず人垣が、延々と続いていた。身延の上

うな地方の駅で求めるのは思いもよらないことだった。

幸い身延山大本願人堀内貞良氏（東京三徳社社長）が、社員の動員して、遂に特急券、それに寝台券までも入手してくれた。

準備は整つた。数万枚の教箋と、驚峰会費で印刷した宮沢賢治の「雨ニモマケズ」のポスター一万枚（それは布教参加の檀信徒へ記念として配布するものであるが）それぞれ九州布教の要所要所へ貨物で輸送された。

正月三日午後三時、二流の玄関旗、二台のケイタイマイク、一組のトランシーバー（携帯無線機）を装備した学生布教別動隊は、整列して祖廟に集結、御廟

塔千の日遊聖人の尊靈に向ひ、九州布教
悲願達成の祈願をこめ、残留学生、身延
町婦人会等々の盛大な見送りの中、午後
四時十六分、身延を出發。午後七時、靜
岡で特急さくら号に乗り換え、長駆九
州へと西下して行つた。静岡では豊橋か
ら駆けつけた大法寺石橋明定法尼一行の
見送る姿があつた。

なお今回の布教別動隊員の氏名は、次
の通りである。

身延山布教部

日高白象 大場支晃 清水英雄

身延山大学三年

小寺崇元 鶴沢晴夫 野出正宣

沢田覚象

藤森觀象

浜島法立

身延山大学二年

福山忠司

藤井宣志

小林白峰

川島本良

宮下鎮嘉

谷口正親

深沢 保

身延山大学一年

花田英喜

立石正昭

福本 実

井前本猛

石橋 隆

永江義子

立正大学一年

上田智良

身延山高校三年

水上泰照

身延山高校二年

阿野由悦

神藤文四

日蓮宗布教研修所

木村幸穂

高田前敬

以上二十八名

九州布教初日の日程は、門司、小倉八幡の布教である。

四日朝八時十二分、特急（さくら）が門司駅にすべりこめば、既にプラットホームには、福岡県宗務所長木島智境師を陣頭に北九州地区寺院十数名の僧陣は、いずれも墨染の衣に手甲・脚絆という街頭布教の姿も凜々しく出迎えており、改札口を出れば、さしもの駅前広場は、数百の檀信徒によって埋められ、各団体ごとに押し立てた玄題旗も物々しく、打ちならす数百の法鼓は、大音響となつて駅の構内から、あたりの市街へ、耳も聋ます。

るばかりに轟き、連絡員は四方に飛んで、むしろ異様な殺氣さえ感ぜしめられ、立正世界平和。宗風宣揚、創価学会折状の氣運は、怒濤の如くたかまつて行く。

出迎えの団体の中には、別動隊の学生

福山忠司君（大学二年）の師僧、福山日種法尼が、未明の四時より遠く飯塚市から、バス三台をもつて約二百名の龍王寺檀信徒を動員しており、また別動隊の日高隊長が北九州出身であり、十三年ぶりの帰國とあっては、旧知の各聖・檀信徒との挨拶も一入感激的であったが、殊に日高隊長の中学時代の恩師田中先生が、わざわざ田川市から一番列車で駆けつけられ、二十数年ぶりに対面をとげられたことは、あまりにも感動的一幕であった。

然し、出発の時刻は刻々と迫る。数百

の檀信徒は指揮班の誘導によって、延々

二列縱隊の隊列をつくる。

午前八時三十分、寒氣も払う熱氣の中、

木島所長の第一声によって、九州街頭布
教の幕は切って落された。

八三八

「人間礼拝に徹することこそ信仰実践の
極地である」
「祈りなき平和はありえない。敵をもい
つくしむ心を深めよ。永遠の光りはその
祈りより生ず」

という一種の言葉が不されている。

大行進は、門司駅頭より大里柳通りの
商店街へ、先導する八幡龍潭寺の伝道方
一、二流の玄題旗、現地僧陣、身延山布
教別動隊、現地檀信徒の順、延々長蛇の
列をなし、鞞鼓唱題は、文字通り市街を
圧し、地軸もゆるがすばかり。

警察署より特に出勤した白バイ数台は
交通整理に当り、隊列の前後左右に散り

た教箇係は、門松を飾った家ごとに、或
は着飾った通行人の人ごとに、しらみつ
ぶしに教箇を配布して行く。

教箇には、

八〇
通りの商店街の要所において二十分間の
街頭講演が始まる。時ならぬ堂々たる大
行進、天地もゆるがす大音響に驚いた市
民は、戸外に飛び出して講演に聞き入る。
講演は聖德太子の十七ヶ条憲法「和を

もって貴しとなす」の第一条に始まり、第二条「驚く三宝を敬え」という萬教篇の一の法華経が打ち出され、國家、世界の現状をかえりみて、配布している教義の説明をもって結ぶ。

この街頭説法は、おそらく市民にとっては、七百年前、日蓮聖人が鎌倉街頭に立って立正安國を獅子吼された往時を憶ばしめるものがあったことであろう。

△四△

これより一行は、待機中の大型バス五台に分乗、数台の自家用車をつらね、関門海峡を左手にしながら門司港方面へ向う。バスには、それぞれ「日蓮宗街頭布教隊」と大書した幟幕が、はりめぐらされていた。

門司地区では商店街の入口、山城屋デパート前より行動開始。正月の人出ににぎわう栄町、桜町のアーケード街では、法鼓はさながらドームの中の如く大反響を起し、市民は目をみはり、耳をおさえ心を奮われる。その中を行進一糸乱れず堂々と進む。

アーケード街の出口に到って、ハタツ警鼓はやみ、行進が停止するや、すかさずマイクを通して立正安國の獅子吼が始まる。

「國土亂れん時は、先ず鬼神乱る。鬼神乱るゝが故に万民乱る」

という仁王經の明文と、

「根深ければ、枝繁し、源遠ければ、流れ長し」

「どうう日蓮聖人の言葉を引用して、「先祖は根であり源である。根が枯れて枝葉はない。源が枯るれば流れもない。先祖をないがしろにして子孫の繁栄はない。報恩を知らない者は畜生にも劣る。汝の先祖が成仏しているか、鬼神となつてゐるかは、まず汝の仏禮をみよ。汝は飯を食い、着物を着飾る。然し仏禮には水もなく、ホコリをかぶつたまゝになつてはいかない。一家の中心は仏禮にあり、社会の中心は寺院にあり、一国の中心は戒禮である」

更に獅子は、日蓮聖人が身延在山九ヶ年間、五十丁の山坂を登り、山頂はあるか故郷の空を仰いで、父母を追善された至孝の事蹟を語り、

「父母慈しと思い、孝養の一分でも果したいと願うならば、たとえ信仰でなくとも、手をあわせて南無妙法蓮華經と唱えよ」

と語る。

これより老松公園に至り、中央の平和慰靈塔の前で、木島所長導師のもと、自我偈一巻をそなえて戦争犠牲者を回向し、立正世界平和を祈願。

この時、多年病床に臥していた本正寺住職高木義介師（日高隊長と立正大学の同級生）が、病弱をおして信徒につきそわれながら、学生布教隊の激励に来られた姿は、あまりにも印象的だった。

午前十時三十分、門司地区の布教を終り、再びバス、自家用車をつらね、門司

地区檀信徒に見送られながら、一路小倉

駅へと向う。

（五）

既に小倉駅前広場には、地区檀信徒が
囂集待機していた。これと合流した街頭
講演の第一声は、日高隊長の肺腑をえぐ
るような叫びであった。

宗教を信する者は、信する自分の宗教
を止しいと思えば思うほど、排他性は強
くなり、他のすべて宗教を否定する。創
価学会もその一例である。

インドでも、その事実があった。印
度では二千年来、ヒンズウ教とマホメッ
ト教は血で血を洗う斗争をくりかえして

来た。

一九四七年八月十五日、インドが大英
帝国の植民地から独立した時、回印両教
の相剋は、遂に頂点に達し、民族を分割、
自國を両断してしまった。東バキスタン
と西バキスタンの独立が則ちそれである。
宗教の対立は、遂に祖国までも分割せ
しめる。インドの歴史は、その生々しい
事実を物語っている。

多年、インド独立運動の陣頭にあつた
マハトマ・ガンディー翁は、ことに、この
ことの来るを恐れていた。

自国内に対立した二大宗教、回印両
教の相剋こそ、インド独立前における大
英帝国の弊病、搾取にも勝るガンディー翁
みずからの嘆きであり悩みであった。

如何にすれば、この両宗教を融和・統一する事が出来るか。回印両教のみならず、一切の対立を越えて、融和・統一をなさしめる、より根源的なるもの、より高次なる宗教はないものか。

ガンディー翁が、ひたすらに至念したものは、インド独立もさることながら、真の独立の母体となるべき祖国の精神的統一、それを成就せしめるものであった。その頃、東方「日出する国」日本國の一角、身延山の奥之院を基点として西天インド開教に旅立った一人の青年僧がいた。一九三〇年八月二十五日のことである。

青年僧は藤井日達といつた。藤井青年の胸中ウツボツたるものは、弘安三年十

一月、日蓮聖人が身延山中で、「日は東より出で西へ入る、日本の仏法の月氏（インド）へ返るべき端相なり」と予言された諫曉八幡鈔の一節であった。インドにおいて仏蹟を巡拝修行すること三年、一九三三年十月四日、遂に中印度、ワルダのアシュラムにおいてガンディー翁と会見する時が来た。

然し、二人の間には言葉が通じなかつた。藤井青年はウチワ太鼓をうつてお題目を唱えるばかりであった。然しこの南無妙法蓮華經の祈りこそガンディー翁が求めに求めあぐんでいた祈りであった。三日すぎた十月七日、ガンディー翁は藤井青年のウチワ太鼓を借りてみずから、しかも日本語の発音で、南無

妙法蓮華經と唱え始めた。

爾來、ガンジー翁は、すべてのインド民衆に向って教えた。

「ヒンズウ教徒もマホメット教徒も、それぞれの祈りの前には、必ず南無妙法蓮華經と唱えよ。」

と。ガンジー翁の偉大なる魂は、法華經に関する一言の教えはなくとも、お題目の祈りこそ、一切の対立を融和、統一する、いわゆる萬善同帰、万教帰一の祈りと直感していたのである。

然し、その祈りも空しく、一九四七年

インドは回印両国に分断して独立した。

ガンジー翁は嘆いた。

「インドの独立は失敗に終った」

と。そして、これを嘆かばこそ、これ

まで英印両国の間に向けられていた非暴力の祈りは、そのまま回印両教の間に指向され、兩教融和を計る祈りの旅が開始された。

然し、それも空しく終った。翌る一九四八年一月三十日、それも午後五時二十分、ニューデリーのビルラ邸園における夕べの祈りの折、ヒンズウ極右翼新聞の「ヒンズウの世界」編集長が狙撃した三発のピストルの銃弾に、ガンジー翁は倒れた。

「アイ・ラマ・ラマ」

我が神よ、これがガンジー翁の最後の言葉であった。崩れるように倒れるガンチー翁の手は、神に向って暗殺者の犯した罪の赦しを乞うが如くであった。

その後十三年、一九六一年、世界的仏教学者どうたわれた東大の中村元博士と宮本正尊博士が、招ねられてインドへ赴き、ニューデリーのガンチー翁の墓前における式典に臨んだ時、数十万のインド

民衆が、式典の始まるや、一勢に大音声をあげて祈りを捧げた。それは日本語であつた。南無妙法蓮華經という唱題の祈りであつたのである。

ガンチー翁が身命を賭した平和の祈り、一切の対立、相剋を融和せしめんとした立正安國の祈り、この祈りをガンチー翁滅後、なお今日までもインド民衆は、ガンチー翁生前の教えのまゝに持ちつづけているのである。

日本人よ、この事実を何とみるか。日

本の一角、身延山より伝つた一粒の仏種は、今やインド三億の民の心田深くうえつけられ、インド人みずから日本の発音をもって、南無妙法蓮華經と唱えてゐるのである。

立正安國の祈りを知らざる日本人よ、インド人に恥しいと思わないか。一宗一派の宗派根性にとらわれた日本人よ、眼を開いて世界を見よ。

「光りは東方より」

と人もいう。二千数百年前、インドの仏法は中国を経て日本に伝つた。今や日本の仏法がインドへ返らんとしている。その因縁を尋ねれば、アジアにおける仏教の復興であり、お題目の光りが東方アジアより全世界の闇を照すのである。

日蓮聖人は申された、

「日蓮は、いずれの宗の元祖にもあらず
また末葉にもあたらず」

と。法華經は一宗一派の經典ではない。
お題目は全人類の祈りである。日本人よ
日蓮に帰れ！、万教帰一・立正安國の祈
りにめざめよ！

小倉駅頭、ビルからビルにこだまする
日高隊長のマイクを通した獅子吼には、
さすがに雜踏する市街の人々の中にも、
駅の構内で列車を待っている人々の中に
も、暫く足をとどめ、耳をかたむけている
人が多かった。

（六）

街頭講演の終るや、百雷一時に落つる

よろくな法鼓の大音響が起つた。大行進は
正月の人波をかきわけるように、小倉の
中央繁華街たる京町、魚町のアーケード
街を堂々と進んだ。

隊列の外側にいる各班長は、陣頭指揮
者の打ちおろすバチさばきにあわせて、
隊列全体の太鼓の音を調整する。この方
法で行けば、隊列が何百メートルという
長蛇になろうとも、何百、何千の太鼓に
一糸の乱れも起きない。

あまりにも堂々たる大行進に、市民は
耳目を奮われ或は思わず合掌し、或は、
「日蓮宗は凄いなあ」

と連発する声が各所に起る。カメラを
もっている者は、これぞ、とばかりにレ
ンズの砲列をしく。

魚町アーチード街の中央で、再び街頭講演二十分、行進は更に続き、正十二時大阪町の真淨寺に入る。住職中村正彦師は、自下身延山大荒行堂に五行加行中。ここで中食の御供養にあずかり、直ちに立錐の余地もない本堂で、木島所長導師のもと立正世界平和祈願、つづいて日高隊長の講演三十分。

その概要是、昨年の暮の十二月、癌の宣告をうけ、余命旬日を待たず、といわれた一婦人が、奇蹟的にも救われたといえ、生々しい物語であつた。

その婦人は、一在家の日蓮宗の信者であつた。婦人の家には、信仰を共にする人々が数名、毎月二回、集つては施餓鬼

供養をするのが、ならわしあつた。

供養の日ともなれば婦人は、先祖の靈や有縁無縁の靈にそなえるオダンゴを一軒の家ごとに四十九個もつくっていた。たとえば五軒の人が来る時は、およそ二百五十個のオダンゴ、十軒の人が来る時は、およそ五百個、それも月二回となれば、毎月およそ五百個から千個のオダンゴをつくっていたのである。

忙しい家事のあいまた、一人でそれだけのオダンゴをつくることは容易なことではなかつた。

然し婦人は、少しもこれを苦にせず、不平もいわず愚痴もこぼさず、むしろ供養の時間に間にあつよう、信仰仲間の人々のため、いなその先祖の靈や無縁の

靈のため、毎月毎月一生懸命オダンゴをつくっていた。

ところが昨年十一月、癌の宣告をうけた。それは二人の医学博士が立ちあつた上での、検便による正確な化学反応にもとづくものであった。

反応は、その病院であつかった患者の中でも最もひどいものであった。医者は今までの患者の例から類推して、「お正月まで命はもたないだろう」と、ひそかに家族の者に告げた。

然し仏天は、その婦人をみすてなかつた。二、三日して行つた精密検査の時には、何處にも癌の形跡は、微塵も発見することは出来なかつたのである。

医者は驚くよりも蒼白になつた。誤診

といえば、これほど甚しい誤診はない。然しご度とも正確な化学反応によるものであれば、誤診ということは絶対にありえないことである。宗教を信じない医者が、この事實をまのあたりにして顔面著白になつたのも無理からぬことであった。自信をもつていた科学では考えられない科学の世界を越えた天の奇蹟が、今あつかっている患者の身の上に、突如として起つたからである。

婦人は救われた。何の計らいもなく。然し、この奇蹟こそ、婦人が日頃、自分の家の先祖の靈のみならず、人々の家の先祖の靈のため、有縁無縁の一切の精靈のため、毎月毎月真心をこめて供養のオダンゴをつくっていた、その功德によ

ものではなかつたろうか。

仏にさゝげた供養のオダンゴ、たとえそれは小さなことであつたとしてもその真心が婦人の命を救つた、と考えるほかないに考えられるすべはない。

小さな善を仏にさゝげよ。真心のみが神仏に通ずる。真心は形にあらわしてこそ力となる。

八

本堂にあふれる聴衆は、深い感動につゝまれながら、水をうつたように聴き入っていた。日高隊長の言葉は更に続いた。そして、

「釈尊の因行果徳の一法は、妙法蓮華經の五字に具足す」

という日蓮聖人の御妙判を引用しては

「お題目そのものが、実は久遠実成の本仏釈尊の因行果徳の一法そのものであつたのだ、という親心をもつ者こそ、本門の法華経を信じてゐる者である」と断定し、お題目受持の在り方として

は、本誌二月号に、

「シユバ・イツアーブ博士を写したユージン・スミスの写真」

と題した日高隊長夫人の、手記内容を一例としてかゝけ、

「妙法五字の光明、燐然として輝く本仏の仏界、この大マンダラ法界の中にある自分みずからを姿を発見する」

「仏界の中への自己投入、そこから眞実の道は開かれる」

「癌の宣告をうけた婦人に奇蹟が起つた

のも、供養のオダンゴをつくるという
仏事を通して、知らず／＼の中にも婦人
自身 既に本仏の仏界の中に攝取せしめ
られていたからである」

と述べれば、満場割れるような拍手が
起る。

講演終了後、本堂前で記念写真をとり
直ちに本隊はバスをつらねて八幡地区へ
向う。一方、真淨寺では別動隊の大場副
隊長以下、小寺、川島の両隊員が残り、
摺信徒と共に信仰座談会を開催、活発な
質疑応答を展開する。

八九▽

午後二時 八幡中央区市民広場に到着
すれば、既に地区摺信徒が多数の青少年

もふくめて百数十名、手に手に小旗をよ
り、広場を埋めて待機していた。

数百の大行進は、僧俗一体となり、擊
鼓の法音も高からに、中央町、春野町、
尾倉町のアーケード街を進めば、商店の
ウインドーのガラスは、大音響にビリビ
リツとぶるえて、今にも割れて落ちんば
かり。。。。。

アーケード街をすぎれば、暫しながら
かな坂となる。坂の上からフト後をふり
かえれば、一キロに余る延々たる大行進
は、ひきも切らず、はるか後尾の方はア
ーケード街を出きらずに蟻のように蜿蜒
している。まさしく壯觀とはこのことで
あろう。

更に行進は擊鼓と共に八幡製鉄所西門

前から縁町、祇園町へと山岸波のおしよ

せるが如く進み、特に創価学会地区幹部

の家の門前にマイクをすえ、完膚なきま
でに学会を折伏する。

それは、絶きわむる折伏であり、行進
に参加した檀信徒さえも、手に汗、肌に
粟を生ずるような、すさまじいものであ
つた。

論旨は、第一次世界大戦の直後、歐洲
を襲った経済恐慌と社会の混亂に乗じて
共産党が、社会革命を起さんとした頃の
こと、共産党撲滅を旗印として抬頭して
来たヒットラーのひきいるナチ親衛隊の
陰謀と謀略が始まった。

ヒットラーは、自分の敵にはすべて、
共産党的烙印をおして、これを糾正した。
そして遂にドイツ政権を掌握した。

それは我が国において創価学会が、學
会以外のすべての宗教に邪宗の烙印をお
して、これを撲滅せんとしていること、
類を同じくする。

政権を掌握したヒットラーは、ゲルマ
ン民族の優越性を裏付ける哲学として、
「二十世紀の神話」をつくった。「マイ
ン・カンプ」ヒットラーの著書「我が斗
争」は、民族の聖典となつた。

創価学会の「富士教學」は、さながら
ナチにおける「二十世紀の神話」であり、
学会初代会長戸田城聖の「折伏教典」は
さながらヒットラーの「マイン・カンプ」

「我が斗争」であった。

学会の優越感は、ゲルマン民族の優越感に通じ、学会の王仏冥合、政治進出はそのままナチの世界征服と類を同じくするものであった。

学会の標榜する「第三文明」とは、ナチが画いた世界征服の上に立つ文明に通ずるものであり、学会が得意とする青年行動隊の体育祭は、そのままベルリン・オリンピックにおける「民族の祭典」の復活に外ならなかつた。

学会々長の独裁は、そのままヒットラーの独裁に通じ、学会の青年行動隊は、そのままナチの親衛隊であった。
第二次世界大戦中、ナチはゲルマン民族の優越感から、人類の歴史上、永遠に

ぬぐい去ることの出来ない、数限りない残酷非道な汚点を残した。

その中、最も酸鼻残酷をきわめたものは、ボーランド、オーシュビツクにおけるユダヤ数百万の虐殺であった。

罪もないユダヤ人は、ただユダヤ人という名だけで、大人も子供も捕えられた。腕には番号数字の入れ墨がされた。最早ユダヤ人は人間でなくて家畜であった。窓も便所もない貨物列車に、ユダヤ人はスシ詰めに積み込まれた。食糧も与えられず幾日も揺られて着いた所はオーシュビツクであった。既に発狂する者もいた。オーシュビツクの浮屠収容所、それはナチが世界に誇る近代科学の、骨を集めた人体整理所屠殺場であった。

ユダヤ人は、豚か鶏のように、三段に仕切られた棚の中に、身動きも出来ないほど積み込まれた。健康な者は強制労働に酷使され、或は医学的人体実体の臨床に供せられた。そして、そうでない者は悉く、「入浴」と称して裸にされ、隊列のまゝガス室の中

に送り込まれた。死体はコンベヤーで運ばれ、一度に釜で焼かれた。しまいには焼却も間にあわず、そのまま穴の中に投げ込まれた。

ユダヤ人の髪の毛は、純毛の織物となり、皮膚はナメシ皮となり、脂肪はセツケン、骨はスプーンとなつて、ドイツ本国の物資不足に補充された。

職後、オーシュビツツの周辺からは、

何百万という虐殺されたユダヤ人の死体が発掘された。ナチの残虐は白日下にさらされ、酸鼻をきわめた記録は、そのままニュース映画となつて、全世界の人々に訴えられた。人類は怒った。

△十△

「然し諸君」

日高隊長は、声を励まして叫んだ。

「これに類する残虐行動が、日本国の中でも起つた。しかも職後、宗教の名において……」

それは昔つて創価学会が、先祖の位牌を焼き払い、神棚を破棄したことと指摘するものであった。

先祖の位牌は、たゞ単なる木片ではない。一念三千の原理をまたなくとも、位牌は先祖の靈のこもる先祖の体そのものである。先祖の位牌を焼くことは、先祖の生身を焼くに等しい。

ナチはユダヤ人を人間以下の動物、家畜として集団虐殺した。学会は位牌を魂もない一片の木細工として焼きすてた。

位牌を木片と思うならば、学会が金科玉条と仰ぐ板マンダラ本尊も一片の板切れにすぎない。然し、それは兎も角としても、一軒の家に五つの位牌があるとするならば、三百万所帯の学会は、何と一千五百万もの位牌を焼きすて、一千五百万人の先祖の靈と体を焼き払ったことになる。

法律上では、たとえ位牌を焼きすても、何ら罪に問われることはない。然しこれを宗教的立場からみれば、まさしく親を殺した尊属殺しの罪にも等しい。

更に宗教的にいうならば、一千五百万の先祖を虐殺した学会の罪科は、ユダヤ数百万を虐殺したナチの暴虐にも勝る。

人類の歴史上、ぬぐい去ることの出来ない汚点となつたユダヤ虐殺は、ドイツ人にとつて永遠に背負わねばならない十字架となつた。

学会における位牌焼却の暴挙もまた同様である。学会は地上に存在する以上、たとえ一人になつたとしても、この罪科は永遠に背負つて行かねばならない。

戰後のドイツは、民族総懲罰の中から

しからずば、みずから放つを先祖焼却の炬火は、やがて大火所焼の薪火となつて、汝等の上に、そして汝等の子孫の上に、降りかかるべからう。

八十一

復興して來た。然し学会は、位牌焼却が政策上まずいと知つて、最近ではやらなくなつたが、それはあくまでも政策の変更であつて、そこには「悪かつた」という一片の反省も感悔すらもなかつた。そして口をぬぐつて政治的進歩の地盤をきずいて行つた。

「大罪なれども よく懲悔すれば、その罪消ゆ。小罪なれども 懲悔せざれば、惡道まぬがれず」

とは、日蓮聖人の教えである。

ナチに類する学会の大罪、これを感悔せずして惡道をまぬがれるはずはない。

汝の親、汝の先祖の、位牌と靈体を焼き捨てた創価学会の者どもよ、大地にひれふして、その大罪を感悔せよ。

日高隊長の街頭講演の終る頃、小倉の真淨寺における座談会をすませた大場副隊長以下三名が、ハイヤーで駆けつけ、更に十数名の隊員を増強、現地僧陣の一部と共に、貸切バスで黒崎方面の街頭布教に向う。

本隊はそれより祇園町の商店アーケード街を駆駛行進。午後四時、龍潛寺に到着、直ちに本堂で木島所長導師のもと立正世界平和祈願、つづいて再び日高隊

長の講演。

その概要は、觀心本尊釈に、

「不輕菩薩は、所見の人において仏身を見る」

といわれた日蓮聖人の言葉を引用し、法華經第二十の常不輕菩薩品の中において、不輕菩薩が街頭、道行くすべての人々を礼拝したという但行礼拝の一例が、これまで日蓮宗の中で、多く仏性礼拝といふ述門立行の理事無碍法界觀に留まっていたことを指摘し、日蓮聖人の教の如くならば、それは仏性礼拝に留まらずして、文字通り仏身礼拝といふ述門立行の、事々無碍法界觀へ飛躍すべきことを強調。

次いで仏身礼拝の実例として法華經第

十一の提婆達多品を引用し、釈尊が提婆達多の現身に、悠久の過去においては阿私仙として法華經を説かれた如來像を、永遠の未来においては天王如來として法華經を説かれた如來像を、共に同時に觀取され、三世を通じて今の提婆達多の姿に対して、感謝礼拝せずにはおられなかつた釈尊の心、その心こそ、実は法華經の心であり、「本釈尊の心の中に入つて、すべてに感謝し、すべてに礼拝を行することこそ信仰の実践である」と結び、多大の感銘を与えた。

△十三▽

この講演に引きつづいて質疑応答に入

るや、檀信徒は膝を乗り出してまで、次に質問を発する。日高隊長は悉く明解な解答を与える。そして総括的に「信仰と生活」の要諦を次のように明示した。

「三界火宅の世の中で、福のない者はない。然し信仰する者は、福のあれば、その禍の根元に向って供養せよ」

「おのれに敵する者あれば、その者の心

に、更にその者をして、そうせしめてい
る因縁の靈に対して、心から供養の誠を
捧げよ」

マタイ伝、第五章の中でキリスト

へ悪しき者にてむかうな。人もし汝の右
の頬をうてば左をも向けよ。汝を訴えて
下衣を取らんとする者には、上衣をも取
らしめよ……。」

「我れ汝等に告ぐ。汝等の仇を愛し、汝等を責むる者のために祈れ。これ天にいます汝等の父の子とならんためなり。天の父は、その日を、惡しき者の上にも、善き者の上にも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからざる者にも降らせたもうなり。」

と言つてゐる。

然し、法華經の信仰にあつては、キリストよりも更に立ち入り、三世の因果、自他彼此の因果の上に、同時の因果を観じて、打つ者も、打たれる者も、同じ因果であればこそ、打つ者の罪は、打たれる者の中に潜在していた罪が顯発したもとのと觀じて、打つ者こそ恩人、善知識と仰ぐのみならず、打ち者の罪をも、我が

罪と背負って、懲悔供養の誠を尽し、打つ者も、打たれる者も、共に仏道を成じて行くのである。

開經偈にいわく

「もしは信もしは譲、共に仏道を成す」

と。

△十四△

こうした質疑応答がされている間、飯塚市より参加していた龍王寺の檀信徒およそ二百名は明日の布教にも再び参加するため三台の貸切バスで帰途につき、黒崎方面の街頭布教より大場副隊長の一行が到着するあたりは既に薄暗く、眼下に望む八幡製鉄所の火が夜空をアカネ色にそめていた。

次で午後五時三十分より龍潛寺書院に

おいて北九州寺院青年会檀信徒の有志と共に晩鑿座談会に移る。

木島所長、龍潛寺住職松尾周輝師（日高謙長の立正時代の旧友）、同総代の挨拶あつて活発な意見の交換が行われ、また日高隊長の十三年ぶりの帰郷としては旧懇談に花が咲き、九州初日の街頭布教が無事盛大に終了したことを祝する中福岡県日蓮宗青年会副会長門司大雄寺刀、祐義昭師が身延山鶴峰会より発行している本誌を絶讚、福岡県下全寺院はこぞって愛読するようになり、要望更に動議として正月十日の布教日程終了後北九州で日高隊長を団む研修会が提案されるや、木島所長が決をとり、正月十三日午後三時より福岡県宗務所、八幡宝塔寺において北九州寺院寺庭婦人

会青年会檀信徒有志合同で日高隊長を団

む座談研修会の開催を決議する。

閉会に当り龍潛寺青年会田淵君によつ

て松口月城作「千代の松原日蓮銅像を仰
ぐ」と題する詩が朗吟される。

念佛無間

禪天魔

真言亡國

律国威

宣布す妙法蓮華經

法鼓聲などして鳴りやまず

我れは仰ぐ英雄 僧日蓮

金剛不壞の大信力

法難聞し來つて念いよ／＼堅く

龍口の劍下 色を動せず

建白す立正安國論

憂世の意氣 烈々として迫る

当年を追憶して銅人を仰げば

邦家今日 感慨きわまる

千代の松原 風 雨々

萬古の傳空 独り黙々

詩魂、学生布教隊員の肺腑をゆすぶり

余韻は、静かに龍潛寺の境内へ流れて行

つた。

△十 五

「明日も頑張りましよう」

と約して寺院檀信徒が辞去した後、特

に布教隊学生に対しても、住職松尾周輝師

は、乞われるまゝに龍潛寺開山山本日

諸上人の略伝について語った。

静かに訥々として語る物語には、聞き

入る布教隊員等しく、更に大いなる感銘

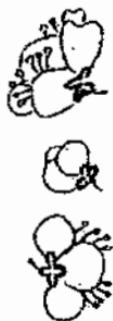
を覚えずにはおれなかつた。大場副隊長

は感動のあまり、

「宗門に、これほど立派な人物が、野に埋れていようとは思わなかつた。しかも近い明治の御代に。日蓮上人こそ僧道地に落ちて現代宗門人の危難ではあるまいか、私は九州まで來てよかつた。この話を聞いたゞけでも、九州まで來た甲斐があつた」

と感歎した。番尾は、ふるえていた。

(以下次号)



釈尊像の写真贈呈

鷲峰賛助会員の方々へは年間
3000円御志納の御芳志に
報ゆべく近日中、本誌表紙の
写真

「インド 靈鷲山へ渡る身延山
金銅の釈尊像」
一枚四ツ切りに拡大して御贈
呈申上げます。

身延山鷲峰会



鷲峰行学研修会と

関西門下青年有志合同座談会

今春、三月五日、身延山大学高校の卒業式を迎え、鷲峰会よりも第一回卒業生を出すこととなりました。

そこで身延山在学三ヶ年、乃至六ヶ年間の行学の総仕上をする意味においても卒業生と在校生が一体となり、今後の行学の指針を明かにすると共に、身延山を中心として全国的だ、或は海外へも布教活動して行く鷲峰会僧侶の基盤を強化すべく、三月十五日瀬戸内海の小豆島、十

六日岡山市における街頭布教を実行するに先きだち、左記の通り第一回行学研修会を実施いたします。

一、期間

昭和三十九年三月十二日（木）十三日・十四日（土）の三日間

一、場所

大阪府八尾市服部川一ノ谷

安國寺（住職、南日常師）

電話一八尾・四局・八二〇一番

一、教学研修主題

「仏教学上よりみた法華經成立の場に立つ今後の日蓮教学の指針」

1、法華經成立の背景

2、仏滅年代考と末法史觀

3、授記作仏と三車一車

4、多宝塔の漏現とその意義

5、地涌の菩薩の出現とその意義

6、二處(天上と地底)の虛空会とそ

の意義

7、久遠の本仏と人間承尊

8、仏舍利供養の義否

9、法華經の菩薩像と僧伽の在り方

一、講義形式

紀野一義著「法華經の探求」(平樂

寺書店発行) 論説 質疑応答式

一、講師

身延山布教師日高白象師ほか

二、傍聴自由

但し初心の御信者は御遠慮願います。

三、講義時間

三日間共 午前八時より十一時まで、午後は若干

四、実践布教

十一日、十三日の二日間 午後より

安國寺隣接の繁華街、八尾・山本地

区街頭布教

五、会費 不要

六、開西門下青年合同座談会

七、講義形式

この研修期間を利用して、三月十四日の

土曜午後一時より四時三十分まで、開西

鷲峰賛助会員紹介

本誌発展のため温かく御指導、御支援を下さいます読者皆さまに、厚くお礼申上げます。特に年間六十人の人々に本誌を見本として贈呈する資金年間三千円を御志納下さいました贊助会員の方々にはここに御芳名を御紹介申上げ、謹んで感謝の意を表します。

大阪	岡本宗治	奈良	藤原祥皓
〃	南 日常	〃	阿知羅一郎
東京	川島一元	神戸	奥町妙代
横浜	田中資郎	福井	石川くめ
福島	小林謙三	千葉	広野稔
鎌倉	藤原文通		

における日蓮宗青年会有志による合同座談会を開催し、地方青年会の交流を計り、その中より今後の在り方に建設的な動向を見出したいと思います。

日下、大阪日蓮宗青年会、京都日蓮宗青年会、奈良立正青年会、中部行学会等々へ案内中、

なお四時三十分より五時まで平和祈願五時より六時まで晩餐会、六時三十分解散の予定。会費不要。申込みは身延山鷲峰会、或は八尾市安国寺。

鷲峰会学生は、三月十五日(日)午前五時三十分安国寺出発、大阪駅下り七時十二分発で三宮へ向い、神戸港八時五十分発の水中翼船で小豆島布教へ参ります。

△二月七日、祖廟靈域の身延川寒流に身を投じた学生有志の修行は無事成満した。昨年十月二十六日より百日日のことである。満願の日近くなるに従つて、毎晩水中自我偈古巻を唱えている学生もいた。龍華日像上人の芳触に習うとはいえ、すさまじいばかりの修行であつた。然しこうした青年僧によつて次代の國家・宗門は興隆して行くであろう。

△三月五日鷲峰会第一回卒業生が出る。卒業生の活躍に期待する所は大きい。四名の卒業生は四月八日を期して熊本から身延まで二千キロ踏破行脚布教を決行し、八月の信行道場へ入る。拍手を送りたい。

鷲峰

三月特別増大号

昭和三十九年・第二卷・第三号

通巻 第九号

昭和三十九年二月二十日 印刷
昭和三十九年三月一日 発行

編集兼発行人

印刷所 甲府市東橋町一八天野勝写堂

発行所 山梨県身延町身延山久遠寺内

身延山鷲峰会

電話 (身延山) 一番・三番
振替 (甲府) 二〇九三番

鷲峰誌代払込みについて

本誌は身延山大学・高校の学生「身延山鷲峰会」が、休暇を返上した行脚街頭布教の淨財をそのまま投入することをはじめとして、毎月必死で発行しているものです。

どうぞ本誌発展のため、一層の御指導、御支援を願い上げます。
誌料未払の方は、出来るだけ早目に、振替用紙（振替口座
→甲府二〇九三番）御利用の上、お払込みを願い上げます。